

第七篇 大陸方面の作戰

第一章 イムパール作戦

1 印度進攻作戦構想の芽生え

昭和十九年から、昭和二十年初頭に亘るビルマ戦局は、悲劇のイムパール作戦を契機として、全戦線崩壊への運命を辿つた。

この運命のイムパール作戦が、何時頃から、如何なる経緯で構想されたか。それは昭和十七年の七月に遡る。日本軍が全ビルマを裁定して、遠く緬支、緬印国境を制圧した直後に、その余威を駈つて、東部印度を、という積極的な構想が南方軍総司令部から胎動し始めたのである。

〔全般戦局と東部印度作戦〕 一方、初期作戦に予期以上の成功を収めた大本営は、五月逸早く、爾後の作戦指導の大綱を定めた。南方においては防衛態勢の整備確立が第一義に挙げられた。

この頃、重慶政権は、一切の地上援蔣路を失つて形而上下共に、孤立の状態に陥り、東部印度のチンスキヤを中継基地とする僅かばかりの援蔣空輸がカンフル注射の役割を果していた。重慶政権の脱落をおそれ、又中国大陸を対日空襲の基地化せんと企む米国は、この援蔣空輸の増強に躍起となつてゐた。

又一方、印度はその頃全く無防備に近い状態にあつた。そして疾風のように、アンダマン、ニコバル群島を制扼し、印緬国境に殺到し、或は印度洋を席捲してきた日本軍の威容を望んで、印度官民の不安は騒然たる有様となつた。ビルマから丸腰になつて潰走して来る数十万の英、印、支の軍隊と避難民が混乱と不安とを倍加した。この情勢に刺激せられて、対英戦争非協力を主張するコングレス（国民会議派）の領導下に、印度民衆の反英独立運動は、険悪の相

を深めはじめた。

戦争終末の契機を、重慶の屈服、英国の脱落到念願する日本にとつて、東部印度が魅力の対象となるのは、自然の成行きであつた。しかし、東部印度に対する作戦要領に関する大本営の構想は、差当り航空進攻作戦に重点を置くものであつて、印度奥地に対する地上作戦に関しては別命によることとして明示しなかつた。

〔二十一号作戦の構想——南方軍〕 ところが南方軍においては、国境方面の敵の防備が見るべきもなく、敵影さえ稀なこの好機、正に乘ずべしとの考えに飛躍した。そして地上軍を以て、一挙東部印度に進攻して、印支空輸を切断し、対印施策の主動権をつかもうとする作戦構想を樹てた。即ち約二箇師団を以てマニプール藩王国（イムパールが首都）を、一箇師団弱を以てフーコン溪谷を突き抜け、爾後相呼応してアッサム州を挾撃して、東部アッサム州のゴラガード、デマブール、シルチャールの戦略要線に進出せんとする雄渾無類の作戦構想であつた。しかもこの要線において、反攻が予期せられる英印軍主力と大決戦を交えんとするものである。

八月、大本営は南方軍からこの作戦構想についての意見具申に接した。しかし大本営は、その研究が極めて杜撰であるとの理由から再研究を求めたが、東部印度に対するかねての戦略的考慮と南方軍のこの意見具申に促されて、八月二十二日大陸指第一二三七号を以て東部印度に対する地上作戦の準備を命令した。その要旨は次の通りであつた。

南方軍総司令官は左記に依り印度東北部に対する作戦を準備するものとす

一、作戰目的

アッサム州東北部の要域及チタゴン附近を攻略確保して航空作戦を容易ならしむると共に援將航空路の遮断に勉むるに在り

二、使用兵力

第十五軍の約半部

三、作戰発起時期

本年十月中旬頃以降と予定す

四、作戰終末の態勢に於ては敵連合軍との間に長遠なる対峙戦線を構成せざる為勉めて正面の緊縮を図るものとす

五、印度施策を推進強化す

六、作戰要領を九月下旬迄に報告するものとす

七、作戰名称

二十一号作戰と呼称す

八、作戰の実施は別命に依る

南方軍総司令官は、直ちに飯田第十五軍司令官に対して二十一号作戰準備を命じた。

〔作戰準備と第十五軍〕 開戦以来、ビルマに対する作戰の規模は逐次慎重に拡大せられた。開戦の初期にはモールメン以南、マレー半島の頸部に制限せられた。ラングーンを含む南部ビルマの要域を目標したのは昭和十七年の一月下旬であり、マンダレーを含む中部ビルマへ拡大を決定したのは三月中旬であつた。それがこの年の夏早くも、このように東部印度大遠征の構想に飛躍していつたのである。この頃北東方面においてアリューシャン列島の、又南東方面においてはニューカレドニア、フィジー、サモア、ポートモレスビー攻略作戰の実施、或は計画が進んでいた。日本軍の戦面は八方に拡大せられ、作戰の節調を誤る危険がこの頃既にはなまれつつあつたのである。

飯田第十五軍司令官及び各師団長は、このような大作戦の準備命

令に接し、当惑の態であつた。殊に中、北ビルマの防衛を担任し、その地形に一番明い牟田ロ廉也中将が、この作戰に難渋の色を示す有様であつた。その主張するところは印緬國境の地勢が、大兵团の運用困難なることと、準備時日の不足に基いていた。第十五軍は多大の懸念を抱きつつ命令に基いて、敵情、地形の調査や作戰路の改修を進めた。準備と研究の進むほど、懸念は増し再考を必要とする氣運が強くなつた。

〔二十一号作戰準備の中止〕 折柄、十二月に入つて南東方面においては、ガダルカナルの戦況が決定的に悪化し、ビルマ方面においても、既述のように英印軍の真剣なるアキャブ反攻が開始せられた。その上印緬、印支國境の敵の防備は、予想以上に迅速に増強せられてきた。かくの如き状況に鑑みて、大本營は、十一月二十三日、この二十一号作戰準備の中止を指示した。しかし大本營の指示は、この作戰構想を完全に断念したものではなかつた。二十一号作戰のための兵力移動や軍需品集積等を禁ぜられたが、作戰の研究は依然続行を認められていた。従つて第十五軍では、この作戰を将来実施せられる場合に備えて、偵察や主作戰路の改修や作戰の研究を続行した。その間、各現地部隊の間に自ずと進攻作戰の思想が培われていつたことは否み得ない。

既に述べた如く翌昭和十八年二月末、策定せられた「昭和十八年度帝國陸軍南西方面作戰指導計画」においても、なお「状況之を許せば印度東北部のチンスキャ附近に対し地上作戰を実施する」願望が示された。逐日増加する印支空輸が重慶政權の抗戦意志を鼓舞し、在支米空軍の活動が活発を加えつつあることや、一段と悪化を辿る印度の政治的不安が、東部印度の政略上の価値をたかめた。しかも、南東方面やミッドウェイの相次ぐ海空戦において、我が海空戦力が減衰したため、印度洋方面から印度に軍事的圧力を加えることが望み少くなつたことが、印度東北方面に対する地上作戰の地

位を一層重くした。しかし如何に念願が強くても、問題はかかる作戰の能否に懸つてゐる。

〔印緬國境の形相〕 ヒマラヤの屋根にあたる印緬國境は世界でも名だたる著境である。その山系は、幅員数百キロに及び、標高一万呎にも達する峻嶒が聳え立つてゐる。その上これら峻難を踏破する前に、ビルマ領内に二つの大障礙が横たわつてゐる。その一つは河幅一キロに達するチンドウイン河であり、他の一つは標高二千五百呎、幅員五〇キロを数えるジビュー山系である。一带樹海に覆われ、蕃民すらまばらな瘴癘の地である。作戰路は僅かに二乃至三条に過ぎない。その最短主作戰路はマンダレー——シェボー——タム——イムパール——コヒマ——デマパール道である。それさえ羊腸たる險路が多く、マンダレーを基点として大約千二百キロに達する。しかもこの著境は世界でも最も雨量多く、毎年六月から九月に亘るモーンズーン季は連日の豪雨続きである。この季節には天地の形相が一変する。すべての河川も溪谷も大木を浮べて氾濫奔流し、道路は崩壊し一切の交通が杜絶する。

飯田軍司令官を始め、現地の指揮官が、このような地勢を案じ、大兵団の作戰が彼れとともに困難であると考へたのも無理からぬことであつた。

〔彼我情勢の変化〕 ところが、既述の如く、昭和十八年二月から四カ月に亘つて行われたウインゲート旅団掃蕩作戰の結果、これまでの認識に大きな変化が生じた。

三月着任した牟田口新軍司令官が四月初めその司令部をメイミョーに推進した頃、第十五軍の主力はウインゲート旅団をチンドウイン河に急追中であつた。同軍の担任防衛線は、怒江正面から北緬のミートキーナ、カマイン、ジビュー山系を経て、中部ビルマのカレワ、ガンゴウに至る千数百キロにのぼつた。しかもその兵力は三箇師団に過ぎなかつた。特に増強せらるべき第三十一、第十五師団

は、既述の如き事情によつてその進出の遲滞が予想された。

一方、軍当面の敵は、チンドウイン河、フーコン、雲南の三正面において大規模の反攻準備を進めつつあることが、益々顯著となりつつある。即ちチンドウイン河正面には英ギフォード將軍麾下の第四軍団（約三箇師団）がイムパールを、フーコン正面には米ステイルウェル將軍の率いる米支軍（約二箇師団）がレドを、又雲南方面には衛立煌將軍麾下のビルマ遠征軍（約一六箇師団）が保山を、それぞれ反攻策源地として反攻準備を進めている。しかもその兵力は急速に増加しつつある。特に各正面における敵の作戰路構築規模の壮大なる諸情報、日本軍を睥睨させた。このほか印度に空艇師団が一乃至二箇あるとの諜報も注意を惹くものであつた。制空權は既に敵の手中に歸していた。これらの敵は本年雨季明け後、中北ビルマ奪回を目指して総反攻に出るものと予想された。

軍司令官は地勢、敵情の新認識に基いて、先ず防衛線をチンドウイン河に推進した。だが、この防衛線も中途半端で、かえつて戦線が拡大し、必ずしも堅固とはいへなかつた。

〔印度施策——ボース、シンガポール進出〕 かくの如くビルマの戦局が日を逐うて險しくなりつつある時、印度を繞る諸情勢も、チャンドラ・ボースが、シンガポールに現われ、独立運動の陣頭に立つに及んで激しい展開を見せた。南方在住数百万の印度人は劇的の歎呼に沸き立ち、独立抗争の氣運は印度人を風靡する勢いとなつた。抑々日本の対印施策は、既述の如く開戦当初から中央及びマレー戦場において開拓された。その成果を基礎として昭和十七年八月二十二日、印度本国に対する対印施策に関する具体的計画が決定された。その主眼とするところは、印度人の反英独立運動を支援し激化させて、実力抗争による印度の独立促進を図るにあつた。これが抗争によつて英国が政略とともに印度を戦争遂行に利用し得ない羽目に陥らしめ、英国の屈服を早めんことを期待した。

ポースのシンガポール進出と時を同じくして印度においては、会議派が八月八、九日ボンベイに大会をひらき、「英国のインド撤退要求決議」を決定して、全面的不服従運動にはいつた。英国は直ちに会議派の非法化を宣言し、会議派の全首脳、尖鋭分子等四万を逮捕し、印度は騒然たる混乱状態に陥つた。弾圧による死傷者は一万を越えた。これら内外の情勢が相交错して日本の対印施策は高潮に達した。

南西方面の戦局漸く風雲急なるこの夏、太平洋方面の戦局は既に暗澹たるものがあつた。即ち北東方面においてはアッツの玉砕に次ぐ、キスカの撤退が行われた。南東方面においては中部ソロモン群島を失ひ、ラエ、サラモアのニューギニア戦線も危殆に瀕していた。連合軍の反攻は急激を加え、中央の焦慮、国民の懸念は日と共に増加していつた。

〔牟田口軍司令官の進攻主張〕 牟田口新軍司令官は、シンガポールの攻略に勇名を馳せた第十八師団長であつた。ウィングート旅団の掃蕩作戦に具に辛酸を嘗め、中、北ビルマの地勢に対する認識を一新した牟田口中将の作戦構想は一転して積極性を加えた。この広大なる戦場において、絶対優勢なる四辺の敵の反攻に対して、守勢作戦を以て防衛を完うすることは不可能に近い。寧ろ敵の反攻に先んじて、敵の反攻策源地を急襲覆滅するに如かずと考へた。太平洋戦局の不振、印度の政治情勢等は、同中将の敢為なる性格と相俟つて、その作戦思想を更に飛躍せしめた。即ち前述二十一号作戦の思想を掬む進攻作戦に発展していつた。シンガポール攻略作戦とアキヤブ作戦における英印軍の脆さが、同中将の自信を一層たかめた。道路の貧困、補給の困難、地形の險難等本作戦成否の鍵たる諸問題については、向後六カ月以上の時日を仮す懸命の努力と、上級司令部最善の配慮を得れば解決不可能ではない。更にこれらの困難は、敵の建設道路や軍需品の逆用によつて緩和し得る。又地形の險難、

密林等は制空権と火力と機械装備に劣る我が軍のために、中部ビルマの平地に戦場を求めるより却つて有利であると結論した。

〔「ラングーン」兵棋演習〕 牟田口軍司令官は、あらゆる機会を求めてこの進攻作戦に関する意見を、熱烈に主張した。その熱烈なる主張は、ビルマ方面軍と南方軍両司令部の関心と呼び大本営の注意をひいた。かくして潜在する東部印度への念願は再び喚起された。その結果、昭和十八年六月の末、ラングーン方面軍司令部において、主として第十五軍が向後採るべき戦略を検討するため兵棋演習が行われた。大本営、南方軍、第三航空軍の幕僚を始めとし、ビルマ全軍の首脳がこれに参加した。その研究は連合軍の反攻を国境内に邀撃して防衛目的を達成するを可とするか、或は進んでイムパールの敵反攻策源地を覆滅する進攻作戦が防衛任務達成上必須とするかどうかの検討であつた。遠くアッサム州に進攻せんとする第十五軍の構想は論外として研究の外に置かれた。そしてその結論は中、北ビルマの防衛を完うするためには、敵の反攻準備未完に乗じて、その反攻策源地イムパールを急襲覆滅し、防衛線をイムパール西側印緬国境山系の險難に推進する作戦を必要とするとの認識に到達した。怒江及びフーコン方面においては本作戦間持久を策することが前提である。第十五軍のアッサム進攻作戦の構想は自然に封止されたがこの思想は第十五軍司令部の脳中になお深く潜在し、その作戦計画の考案にも微妙に反映することとなつた。補給の困難を如何にして解決するかという重大なる命題が懸案のまま残された。

この作戦遂行のため、一五〇箇の自動車中隊、六〇箇の駄馬輜重兵中隊と有力なる野戦道路隊の必要が計上せられ、方面軍に申請された。

2 作戦準備発効の経緯

〔「ウ」号作戦準備命令の下達〕 寺内南方軍総司令官は七月上

旬、稲田総参謀副長を大本営に派し、イムパール作戦の必要性を具申せしめ、同時に本作戦に必要な部隊、即ち第十五、第五十四師団、独立混成第二十四旅団及び兵站諸部隊の増強と軍需品（彈藥四箇師団分、自動車部分品一千輛分その他）の増加交付についても大本営の配慮を求めた。

九月初め大本営は、イムパール作戦準備について正式に指示を与えた。

南方軍はこの指示に基いて、次の要旨の準備命令を下達した。

ビルマ方面軍司令官は左記要綱に基き、作戦を準備すべし
一、ビルマ方面軍はビルマ防衛強化の爲、イムパール方面に攻勢をとり防衛線を該要線に推進す 爾他の正面に於ては持久を策す

本作戦を自今ウ号作戦と呼称す

二、ウ号作戦は準備完了に伴ひ、自主的に実施す

攻勢発起の時期は十月以降と予定するも別命す

三、敵若し、我に先ち反攻し来る場合は、之を攻撃準備の位置に遡撃し之を撃擯し引続きイムパール附近の要線に進出す

四、敵若し、我がウ号作戦実施に先ち海正面に主反攻を実施する場合は、ウ号作戦を中止し海岸方面に方面軍主力を集中し之を撃擯す

一方、第十五軍は七月以降ウ号作戦の認可必至と予想して、その作戦準備にあらゆる努力を傾けていた。その主なるものは、作戦計画の研究、敵情の捜索、地形の偵察、作戦路の構築、部隊の編制裝備の改編、補給の研究等であつた。その中でも困難な課題はジビュー山系を横断してチンドウィン河に通ずる二条の山径を乾季自動車道に改修する作業であつた。折柄の雨季を冒して強引な突貫作業が開始された。師団は駄馬編制、山砲裝備に改編された。前に述べた如く膨大な兵站部隊の増加が申請されたが、方面軍から予約を受け

た兵力はその六〇％に満たなかつた。これを補うため、あらゆる現地の資源や資材の活用が真剣に準備された。現地牛車駄牛の徴発及び訓練、各種代用食の利用やジンスカンの故智に倣う生牛、山羊等歩く食料の帯同等がその一例であつた。この十五軍に鶴首していた前記方面軍の準備命令が下達されたのは九月中旬であつた。

〔作戦計画——特色と弱点〕 牟田口軍司令官は直ちに各師団長に、かねて研究していた作戦計画を内示し、兵力の前線移動と作戦準備を命じた。

作戦の方針は、先きにラングーン兵棋演習において到達した結論と概ね同様であつた。そして主作戦の発動を年末若しくは翌年の初頭と予定された。特に強調されたのは奇襲により、約一カ月を以て作戦目的を完遂することであつた。

作戦要領の主なる点は次の通りであつた。

一、怒江方面に対する作戦

十月上、中旬の間に怒江西岸に進出して居るビルマ遠征軍の一部を撃滅して、その反攻拠点を取奪する此の作戦は第五十六師団の全力と第十八師団の一部を以て実施する爾後第五十六師団独力を以て該方面重慶軍の反攻を阻止せしめる

二、フーコン溪谷方面作戦

第十八師団は独力を以て、モウガン附近を根拠とし、溪谷に於て米支軍の反攻に対し持久戦を遂行する

三、イムパール進攻作戦

第三十一師団を以て長驅コヒマを占領し、アッサム方面より來攻する英印軍を阻止せしめる 此の間第三十三及第十五師団を以て南北よりイムパール盆地の敵を急襲撃滅する

之が爲先づ第三十三師団をモーライク及南部チン高地より夫々カバウ谷地とマンブール河沿ひに、イムパールに向ひ北面して突進せしめる 此の攻勢に依つて敵第四軍団の主力を南方に牽

制すると共に、先づティデム、トンザン地区のチン高地に突き出して居る敵第十七師団を包囲して各個に撃滅する。

第十五、第三十一師団はチンドウィン河上流のホマリン、パウンビン地区に於て密かに渡河準備を整へる。敵が第三十三師団正面に牽制せられて居る好機に、同河を渡河し、第十五師団はイムパール北方に、第三十一師団はコヒマに向つて峻峻を踏破突進する。イムパール挾撃に當つて、第三十一師団のコヒマ方面の戦況これを許せば、その有力なる一部を総攻撃に反転参加させる。

イムパール攻略に成功すればコヒマ周辺、イムパール盆地西側の山系、「チン」高地の要衝に堅固な防衛線を構成する。第三十三師団の主力はカレワ附近に集結して、他方面の作戦に備へる。

イムパール作戦間の補給は、進攻間（約三週間）の所要を各師団毎に自力を以て携行する。イムパール攻略と共にカレワ——タム——バレル——イムパール——コヒマ道に依る突破補給を実施し、爾後此の道路を主兵站線とする。

右計画は、牟田口軍司令官の性格と日本軍戦法の伝統に象徴する蟬越戦法であつた。特に兵力の三分の一を、コヒマに分割したのは敵の増援阻止のほか、かねてからアッサム進攻を念願する第十五軍が、将来更に進攻に備えんとする微妙な一石でもあつた。この兵力の分散は本作戦失敗の重大禍因となつた。しかも作戦が予期的ように進展し得ない不慮の事態に備える考慮と計画とが欠けていた。

〔準備行動開始——戦機熟す〕 各師団は、右の軍命令に基いて、雨季未だあがらぬ前線に兵力の推進を開始した。第十八師団はミートキーナ、モガウン地区に、第三十一師団は北部ジビュー山系西側地区に、第三十三師団はカレワ附近チンドウィン河兩岸からカバウ

谷地に亘つて、主力を集中して攻撃準備を急いだ。

第五十六師団と第十八師団の一部は怒江作戦の準備行動に移つた。当面の敵もまたこの頃、前線への移動と搜索行動を活発に展開し、戦機漸く熟し、戦局は一段と緊迫を加えた。

3 怒江及びフーコン作戦の展開

〔怒江作戦——ウ号作戦の序幕〕 十月三日ウ号作戦の序幕は、先づ怒江作戦を以て雲南省に切つて落された。衛立煌將軍麾下のビルマ遠征軍は、怒江東岸に詰めかけていた。西岸に進出している重慶第三十六師は反攻拠点強化していた。遙かに霞む峡谷底を、怒江は咆哮しつゝ奔流している。西岸沿いの高黎貢山系は一万二千呎の峻嶺に雪をいただき、その西方の麗水平地は一望黄金の穂波であつた。怒江作戦は騰越北方のこの麗水平地と高黎貢山系一円に繰り展げられた。作戦は予期の如く進展し、敵は怒江東岸に遁走し去つた。十月下旬作戦を完了し、この方面の作戦は第五十六師団に一任せられ、第十八師団の部隊はミートキーナ方面へ反転を開始した。

〔死（フーコン）の溪谷彼我の衝突〕 その矢先、フーコン溪谷の北端タナイ河畔において突如彼我の衝突が起つた。遠く国境方面に挺進しつゝあつた第十八師団の一搜索中隊が、十月三十日タナイ河畔において兵力不明の中国軍と衝突したのである。その飛電はその夜、三〇〇軒後方のミートキーナ師団司令部に達した。

このフーコン溪谷は、東西の幅員二〇〜七〇軒、南北の深さ二〇〇軒に及ぶ大盆地である。その中央に横たわる台地によつてくびられて、瓢箪のように南北の二盆地に区分せられている。北部盆地は、チンドウィン河の上流タナイ河孟で、大小無数の支流が網の目のように交錯している大密林地帯であり、雨季は大沼沢地帯となる。南部盆地はモガウン河が縦走している。戦前この地区は非統治地区であつて、少数のカチン族が蕃居するに過ぎない、コレラと悪

性マラリヤの巢窟で、死（フーコンの意味）の溪谷と呼ばれる所以である。この溪谷の北方には幅員百軒標高七千呎に上る国境山系が東西に延びている。この山岳地帯はナガ蕃境と呼ばれ、剽悍摩猛を以て聞えるナガ蕃族の棲息地である。

〔レド公路と敵の奪回企図〕 連合軍が奪回を志す印支地上連絡路レド公路とは、アッサムの東隅レド——油田で有名——を基点とし、このナガ山系とフーコン溪谷を潜り抜けて、モガウン、ミートキーナ、バーモ、ナンカンを経て、支那事変中援將ルートとして有名な緬支公路に接続せんとするものである。レドからミートキーナに至る数百軒の難境に、昭和十九年秋までに、乾雨季を通じて確保し得る自動車道を建設し、更にこれに併行して油送管を敷設して中国に軍需品と燃料を補給せんとするものである。これを以て一つには重慶軍九〇箇師を米式装備に改編して大反攻に転ぜしめ、一つには中国を基地とする米戰略空軍を強化して日本本土を空襲すると共に米太平洋軍の横断作戰に策応せんとする大戰略であつた。このレド公路建設は天文学的規模の大作業であつた。米スティルウェル大將がその立役者であり、ルーズベルト大統領が最も熱心にこれを支持していた。

これがため、アッサムにおいて、米軍式訓練を施した孫立人麾下の中国軍一箇軍（二箇師）を編成してフーコン方面からの反攻作戰に当らせつつあつたのである。この中国軍は、この頃強大なる米軍工兵のほか歩兵部隊、戦車部隊、衛生部隊、補給部隊によつて補強せられ、その兵力は五万に達しつゝあつた。その上有力なる空軍によつて補給と戦闘を支持せられていた。その情況は主として敵の暗号解読によつて逐次判明していた。而して中国軍の兵力は更に増加するものと予想せられた。

日本軍は、敵が援將路打通のため、雨季明けと共にこのフーコン方面の米支軍と雲南方面の米支軍が相策応して反攻し来るものと予

期していた。しかし前記のように太平洋方面の作戰や対日大空襲と関連を持つ重大なる作戰とは考え及ばなかつた。しかもこの道路工事の困難性から、敵が雨季明け直後かかる早期に本格的な反攻を開始し得るものとは予想していなかつた。猛將田中将麾下の第十八師団は連合軍のこの大反攻の鋒尖に立ちほだかつていたのである。

当時第十八師団は、数百軒に亘る廣大なる地域に分散していた。南部フーコン地区に集結していたのは、僅かに歩兵三箇大隊のみであつた。四箇大隊は前記怒江作戰からミートキーナに帰還行軍中であつた。その他はミートキーナ、バーモや南方のカササ附近に散在していた。しかもなお新たに編成せられる第三十一師団のため、その兵力の三分の一を割き、火力と輜重の兵力とは二分の一に低下していた。

〔牟田口軍司令官と田中師団長の意見対立〕 両軍衝突の報に接した師団長は、当面の敵、米支軍主力の越境進出を掩護するため、先遣された敵の一部に過ぎないと判断し、これを各個に撃破せんことを企図し、先ず南部フーコンの第五十六聯隊に急進を命じた。この聯隊が戦場に進出して交戦するに及んで、敵は中国軍第三十八師の有力なる部隊であることが判明すると共に第十八師団が嘗て中国大陸で交戦した中国軍とはその素質の全く異なることに驚いた。従来は日本軍一箇大隊を以て、中国軍一箇師を屠ることが通り相場であつた。殊に九州で編成せられ、中国大陸を縦横に連戦したこの歴戦の師団は中国軍との戦闘に最も強い自信を持っていた。ところがこのフーコンの中国軍は、編制も装備も、戦法も訓練も、全く面目を改めていた。歩兵第五十六聯隊の勇戦力攻に拘らず、その円形陣地は、稠密なる火網と空中補給に支えられて圧倒し切れないのみならず、我が損害は続出する有様であつた。九百名近い損害を敵に与えたに拘らず敵は頭として密林の陣地を譲らなかつた。これが情報

直ちに報ぜられて全軍を愕然たらしめた。

田中師団長は、依然各個撃破の企図の下に、師団主力を提げて、国境山系の隘路ロシンブヤンに向つて攻勢を断行せんとする決心を採つた。その攻勢は十二月十五日と予定せられた。当時本戦闘に参加し得る師団の兵力は四千名内外に過ぎなかつた。

この決心は十二月上旬牟田口軍司令官によつて阻止された。イムパール進攻作戦を控え、補給輸送機関に悩んでいる軍としては、支作戦正面たるフーコン方面に自動車隊を増派することが出来ない実情にあつたからである。第十八師団が遠くタナイ河北方に戦場を求めるためには、更に数箇中隊の自動車が必要とした。軍司令官は「現在の攻勢を中止し、マインカン周辺に於て敵を邀撃すべし已むを得ざるもカマインを確保するを要す。タナイ河北岸に対する現在の増援は軍司令官の認可を要す」と嚴重な命令を下達した。この命令は第十八師団長を始め、部下指揮官の心を害した。軍としては當時已むを得ない実情ではあつたけれども、予め師団の作戦要領について適確な指令が欠けていたことは手落ちであつた。

田中師団長は、この軍命令に接し、作戦方針の転換を余儀なくされた。師団長は先ず現戦線タナイ河畔において、真面目な攻勢防禦作戦を遂行し、敵を成るべくなく北方に拒止せんとした。その目的はこの間マインカン周辺における作戦準備を周到にし、同地以北において昭和十九年の雨期(五月)まで時を稼ぎ、雨期間は飄箏のくびれに當るジャンプ、キンタンの台線において対陣状態に入るにあつた。

しかしタナイ河畔への敵の増加は、予想に反して迅速であつた。しかも豊富な空中補給に援けられつつ、敵は猛烈なる正面攻撃と大規模の迂回攻撃とを併用した。第十八師団の反撃は不成功に帰し、損害もまた甚大に上つた。長遠且つかばそい地上補給線は執拗なる敵機の攻撃を蒙つて師団の補給は逼迫し来り、タナイ河畔における

師団の戦況は極めて重大となつた。

かくてイムパール進攻作戦の決行が未だ決定を見ない十二月に、フーコン方面は早くも敵の本格的反攻に直面した。しかも思いも寄らぬ苦戦に陥り、ウ号作戦の前途に一抹の不安を抱かしめた。

〔連合軍の大規模反攻協議〕抑々ビルマに対する連合軍の反攻決定は、昭和十八年一月、カサブランカ会談に始まつてゐた。

この会談において中国との地上交通再開が決定された。次いでこの年の五月、ワシントン会談において、印支空輸月量を一万噸に増加し、雨期明け後ビルマ反攻作戦を開始する一般決定が行われた。

続いて八月のケベック会談で詳細なるビルマ反攻計画が樹てられ、フーコン、ミートキーナ方面に対する反攻を、昭和十八年の冬から翌十九年にかけて実施し、レド公路の再開、これに併行する油送管の敷設が決議されたのであつた。十一月に、英、米、重慶の三頭首がカイロに会して、再び北ビルマ反攻作戦が確認された。

このカイロ会談においては、蒋介石の主唱により、ベンガル海岸方面からのビルマに対する全面的反攻も研究されたが、この提唱はヨーロッパ大陸反攻のため、所要資材を割愛出来ない事情を理由として断念された。

ビルマ反攻の協議中、連合国の間に、深刻な意見の相違と論争があつた。前述したように米國は、最も熱心に速かなる印支地上ルート再開を固執した。これに対し英國は常に氣乗り薄であつた。ビルマ反攻は独逸の敗北まで見合せたい希望を持つてゐた。シンガポールの奪回を重視する英國は、この間スマトラを経てマレー、シンガポールへの反攻を熱望した。重慶は固より米案を歓迎するところであるが、中國軍の犠牲のみで行われる北ビルマ反攻には極めて警戒的であつた。そのため、前述のように北ビルマ反攻の前提として、英印軍が海岸方面から大規模の反攻を行つて相策應することを執拗に主張して尻込みをしていた。政略の根本的相違からくる必然

の論争である。

これがため、現地反攻代表者蔣介石とステイルウェル、ステイルウェルとマウントバットンとの間に激しい対立や反目が繰返された。その度毎にルーズヴェルトとチャーチルの二頭首が談合調停の勞をつた。

フリーコンに展開せられつつあるこの激戦は、米国の主張が強引に実現せられつつあることを物語るものであつたが、当時日本軍はこのような連合軍の内幕を知る由もなかつた。

〔英印軍の反攻動向〕 フリーコンの米支軍に策応するかの如く、年末と共に印緬国境の英印軍の動向は頓に活発となつた。スリム英將軍麾下の第十四軍は第四、第十五、第三十三軍団から成り、ひしひしと東部印度に押し寄せていた。

その第十五軍団（約四箇師団？）がアキャブ方面に配せられ、その二箇師団が再び我が第一線、モンドウ、ブチドンの陣地線に近迫していた。後方のチタゴン附近にも一兵団が認められ、ベンガル灣岸に対する敵艦艇の蠢動も活況を帯びてきた。

イムパール方面の第四軍団は第十七師団をトンザン、ティデム地区に、第二十、第二十三師団をイムパール、パレル、タム、ウクル地区に配置し、その有力なる一部を我が第一線近く推進して威力偵察を反復していた。別にイムパール平地には戦車兵団が進出してゐるとの諜報もしきりであつた。特にイムパールからチンドウイン河畔に進出する各作戦路の構築とイムパール、パレル、タム飛行場の建設が一段と活況を帯びてきた。

第三十三軍団（二箇師団？）はアツサムのシロンを中心とする地区に第二線兵団として配備せられ、イムパール、アキャブいずれの方面へも進出し得る態勢を占めていた。当時印度内の動員も急速に進展し、第十四軍を含め全印度の兵力は百万と推測せられた。（實際は約一六五方に達していた）カルカタやチタゴンに出入する輸

送船は幅湊を極めた。

〔その後のビルマ遠征軍〕 一方雲南方面の衛立煌麾下のビルマ遠征軍も怒江西岸の反攻拠点を失つたが、その反攻準備は益々活発となつてきた。広東及び重慶方面から戦略兵団が昆明地区に集結せられていた。各師団の兵員も充足し、米式兵器も配当せられ、怒江渡河点に通ずる道路の建設に大童になつてゐた。その兵力は一四箇師に達すると判断せられた。

〔敵空軍の跳梁——全ビルマ制圧〕 援蔣空輸の使用機數も二百機に増加し、輸送月量は既に五、六千噸に上つた。在印空軍は概ね七百機に達し、十九年の春には一千機に増加するものと判断された。そのほか在支米空軍は約四百機と推算され、ビルマ全域の制空權は敵手に陥ち、昼間列車や自動車車の運行が全く不可能に陥つてゐたばかりでなく、目星しい橋梁は大部分爆撃せられてしまつた。

〔我が敵情判断〕 以上の敵情から第十五軍司令部は「連合軍は一部を以てアキャブ方面に攻勢を採り主力を以て英、米、支三軍策応して先づマンダレーに向つて求心的に進攻、その進展に伴ひ海正面に反攻を拡大し全ビルマの奪回を企図す」との從來の判断に、確信を強めた。大本營や、ビルマ方面軍、第五飛行師団司令部においては敵が海正面から主反攻を行う算も少くないとの判断があつた。南方軍總司令部では、更にアンダマン、スマトラ、北部マレー半島の西海岸に反攻するかも知れないとの懸念を持つてゐた。

かくの如き判断や懸念が、イムパール作戰に重要な役割を演ずべき第十五師団を長く泰國に止め、その戦場進出を遅延せしめ、又ビルマ内における軍の兵力配分に徹底を欠く一素因となつた。

〔必死のイムパール進攻準備〕 かかる緊迫せる情勢の裡に、第十五軍は全軍を挙げて作戦準備に必死の努力を払つてゐた。ジビュ山系横断作戦路も概成しつつあつた。第三十一師団及び第三十三師団はそれぞれ主力をジビュ山系西側、チン高地に推進し、進攻発

起の態勢に移りつつあつた。独り第十五師団のみは十一月中旬漸くビルマに前進を命ぜられ、主力は泰・緬国境を越えて蜿蜒徒歩行軍中であつた。その全兵力がチンドウィン河東岸に進出し得るのは三月末においても危ぶまれる状況で、昭和十九年早々の進攻発起は遂に不可能になつた。雨季の到来と敵の反攻動向とに鑑み、なるべく早く進攻を開始することが何より重要なに拘らず、第十五師団のこの状況は第十五軍首脳の焦慮をかき立てた。第十五師団は一部未到着のまま、しかも準備不十分の中に遭遇戦の逐次戦闘加入式、この困難なる大作戦を遂行せざるを得ない羽目に立ち至ること必至となつた。

〔第五飛行師団のカルカッタ、雲南進攻〕 我が航空作戦も困難なる状況に置かれていた。ビルマの航空作戦は、第五飛行師団（師団長田副登中将、昭和十九年十二月二十六日以降、服部武士中将）が担当していた。そしてその戦力は戦闘五箇戦隊、軽爆二箇戦隊、重爆二箇戦隊、司偵一箇戦隊であつた。このほかにラングーンに海軍航空部隊が配置せられていたが、その総兵力は三九機に過ぎなかつた。

航空部隊はかくの如き寡兵を以て防空作戦に任じつつ東部印度及び雲南の敵航空基地の攻撃、印支敵空輸機の遠撃を敢行し、八面六臂の活動を遂行していた。即ち十二月五日には陸海軍機一六〇機を以てカルカッタ港を攻撃し、大戦果を挙げた。続いてこの月チタゴン、雲南及び昆明両基地を反復攻撃した。

しかしながら我が損耗累増するに反し、敵の増勢日毎に著しく、その上年末から相次いで主として南東方面へ兵力を転用せられたため、十九年の初頭にはビルマの防空さえ意の如くならない状況となつた。しかも近く開始せられる地上軍のアカブ作戦や、イムパール進攻作戦に対する協力に應ずるため、兵力の整備、温存の必要が加わり、一層その作戦を制肘した。

4 イムパールに向う進攻作戦

〔イムパール進攻作戦の決断〕 ビルマにおける彼我の情勢は以上の如く進展しつつあつたが、大本営は今なおイムパール作戦の発動に慎重な態度を持っていた。北部ソロモン群島、ダムビル海峡地帯の崩壊、ギルバート群島の失陥等、愈々急迫を告げる太平洋方面の戦局と特にビルマ南西海岸及びアンダマン、ニコバル方面に対する敵の反攻予想と相俟つて、本作戦に対する大本営の考慮を一層慎重にした。

寺内南方軍総司令官は十二月下旬、総参謀副長綾部中将を東京に派遣し、イムパール作戦実施に関する意見を重ねて具申し、大本営の決断を要請させた。大本営は綾部中将に対してイムパール作戦に關し、大本営が危惧している次の五項目について見解を糺した。

一、ベンガル湾方面、南部ビルマ沿岸に対する英印軍の上陸作戦に対し多大の顧慮を要する所ウ号作戦実施中の場合対応措置が採れるか

二、イムパール平地の攻略に依つて更に兵力の増強を要する結果とならぬかそしてビルマ防衛上不利を来さないか

三、我が航空戦力が極めて劣勢であるが地上作戦の遂行には支障がないか

四、補給の追隨が可能か

五、第十五軍の作戦構想は堅実性に就いて大丈夫かこれに対して綾部中将は従来の研究を詳細に説明し確算を有する旨を答えた。特にこの作戦の実行によつて防衛戦をイムパール附近の堅固な地形に托することが出来るからて寧ろ兵力を節用しつつ、ビルマの防衛を堅実にし得ると強調した。

大本営は南方軍のこの見解に基いて、十二月三十一日、ウ号作戦認可の決意を固め、昭和十九年一月七日これを認可した。即ち大陸

指第一七七六号を以て「南方軍總司令官はビルマ防衛の爲適時当面の敵を撃破してイムパール附近東北部印度の要域を占領確保することを得」と指示した。

〔一抹の懸念——大本營の要望〕 本作戦になお一抹の懸念を有する大本營は、一月八日特に次の事項を南方軍總參謀副長に托し、作戰の指導に慎重を期するよう次の如く要望した。

ウ号作戰の發動に関しては予ねて當部に於て種々検討しありたる所今般貴軍の的確なる研究並に意見に依り本作戦の遂行及其終末に關し確算を得たるを以て大陸指第一七七六号を以て之が發動を認可せられたり申す迄もなく本作戦の指導に方りては遠からず必ずと予想せらるるビルマ南西海岸方面の防衛作戰に遺憾なからしむると共に本作戦の終末指導を的確にし其の実施が反て全局の作戰遂行に支障を來さざらんことに就ては此上とも十分の配慮を切望する次第なり

かくて昭和十七年夏以来幾度か問題になつて來た印度進攻作戰が遂に決斷されるに至つた。

しかしながら印度及び重慶を対象とする積極的戰略目的を以て、深く東部印度に進攻せんとする作戰思想はこれを以て一応放棄せられた。ウ号作戰はビルマの防衛強化という消極的戰術的作戰として採択されたのであるが、対印攻略的效果を念願する微妙な氣運がなお伏在していたことは否定出来ないものがあつた。一月下旬河辺方面軍司令官は、牟田口第十五軍司令官に対しウ号作戰実施の命令を下達した。

〔方面軍の全局作戰指導計画〕 方面軍司令官のウ号作戰を中心とするビルマ全局作戰指導計画の骨子は次の通りであつた。

- 一、ウ号作戰企図を秘匿し且その作戰を容易にする爲その発起の二乃至三週間前にアキヤブ正面に攻勢を採り（ハ号作戰と呼称す）敵第十四軍を此の方面に牽制抑留す

二、フーコン方面に於ては第十八師団をしてカマイン以北に於て又怒江西岸に於ては第五十六師団をして夫々持久せしむ

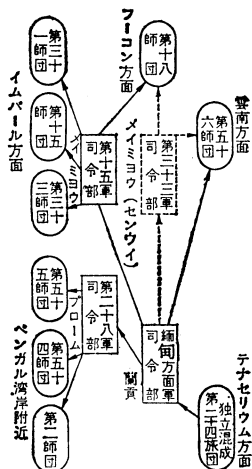
三、第十五軍は先づ一部（第三十三師団）を以てチン高地方面より攻勢を開始しイムパールの敵第四軍団を極力此の方面に牽制しつつ軍の主力（第十五、第三十一師団）は急襲的なチンドウイン河を渡河し一挙にコヒマを占領して敵の増援を遮斷すると共に主力（第三十三、第十五師団等）を以てイムパールの敵を包囲撃滅する

〔方面軍指揮組織の改編〕 ビルマ方面軍司令官は、方面軍の予備兵団皆無の狀況に鑑み、南方軍に対して第二師団の迅速なるビルマ進出と第五十三師団の増加を要求した。又第十五軍に対してはウ号作戰を概ね一カ月を以て神速完全に成功を収めんことを強く要求した。なお第十五軍をしてイムパール攻略作戰に専念せしむるため、雲南方面の第五十六師団を方面軍において直轄することとなつた。

フーコン方面の第十八師団は、ウ号作戰と地域的に密接なる關係あるを以て、依然第十五軍に委ねられた。これより先、方面軍司令官はベンガル湾に面する沿岸防衛のため、第二十八軍司令部を、又雲南省フーコン方面の作戰を主宰せしむるため第三十三軍司令部を新たに設置するよう南方軍總司令官に申請していた。一月十五日先ず第二十八軍司令部（軍司令官桜井省三中將）が新設せられた。

第二十八軍は第五十四、第五十五師団のほかガダルカナル撤退後フィリピンにおいて再建中の第二師団がその隸下に編入せられた。これを以て昭和十九年二月頃におけるビルマの日本軍兵力は、一方面軍司令部、三軍司令部（そのうち一は予定）と八箇師団（但し二箇師団はビルマに進出中）、一箇旅団となつた。

その指揮と作戰と作戰担任地域の關係は、次表の通りである。
〔空地作戰協定——展開〕 ビルマ方面軍司令官はその作戰計画を基礎とし、第五飛行師団と空地作戰協定を行つた。本協定の特色は、飛



- 備考
1. 第十五師団と第二師団は緬甸に前進中
2. 点線は予定
別) 第十五師団の増強を申請中

行師団の劣勢に鑑み、敵航空勢力撃滅作戦を主とし地上作戦に対する直接協力を従としたことであつた。その要点は次の通りである。

一、ハ号作戦は攻撃開始を二月三日と予定しウ号作戦発起の十日以前にその作戦を終了す

二、作戦に対して第五飛行師団は一部を以て常時協力す

三、ウ号に対する協力は第五飛行師団の主力を以て実施す

四、ウ号作戦協力要領

1 攻勢発起の初動特にチンドウイン河の渡河時戦場上空の制空

2 我が地上軍の攻撃を妨害する敵機並敵飛行場の攻撃

3 戦場著名目標、特に敵機甲部隊、砲兵に対する攻撃

五、一部を以てベンガル湾方面の哨戒を実施す

六、敵空挺部隊の降下に際しては第五飛行師団は機を失せず為し得る限りの兵力を以てこれを攻撃す

ウ号作戦協力のため第五飛行師団は、主力を以てカロー、メークテラ地区の基地に、有力なる一部を以てトングー、ラングー

地区の基地に展開した。

【印度国民軍との協同作戦】 なおウ号作戦の特質上、印度国民軍との協同作戦がビルマ方面の新しい課題となつた。即ち印度国民軍司令部及び印度国民軍第一師団と特別任務の部隊若干がこの作戦に参加することとなつた。ビルマ方面軍司令部は自由印度政府との協定に基づきその第一師団主力(約七千名)を第十五軍司令官の指揮下に入れた。ウ号作戦に伴い占領地印度領の行政管理は、挙げて自由印度政府の解放地行政委員に一任する如く協定せられた。

【第十五軍の進攻命令下達】 第十五軍司令官は待望の方面軍命令に接するや直ちにかねての構想通り計画の最終決定を行つた。但し作戦発起の日時とチンドウイン河の渡河計画(特に企図の秘匿と対空掩護)の二点が改めて検討せられた。第十五師団の進出状況と雨期前に作戦を了え防衛態勢を確立する必要とを睨みあわせて作戦開始日時を選んだ。即ち第三十三師団は三月八日、軍主力は三月十五日それぞれ作戦を発起することに決定した。

次に敵空軍の絶対優勢下に、幅一千米以上に及ぶチンドウイン河を数千頭の馬匹、生牛、羊、象を伴う軍の主力が敵前渡河を執行することは何といつても一大冒険であつた。これが成功の要諦は奇襲渡河に成功すること以外にはなかつた。これがため企図の秘匿にあらゆる工夫を凝らし、又万一に備え、第五飛行師団は渡河の前日及び当日全力を挙げてチンドウイン河上空の制空掩護に任ずる如く協定を遂げた。同師団の兵力に鑑み、渡河掩護に徹底し爾後の地上作戦協力は期待しないことを申し合せた。

第十五軍は一月二十五日先ず第十五、第三十一、第三十三師団に對し、ウ号作戦の展開命令を下達し、次いで十一日紀元の佳節を卜してウ号作戦発起の命令を発令した。補給上の懸念は依然解決されていなかつたのみならず寧ろ条件は更に困難を加えていた。

所要補給部隊の約六〇%充足が予約されていたが、実際の充足兵

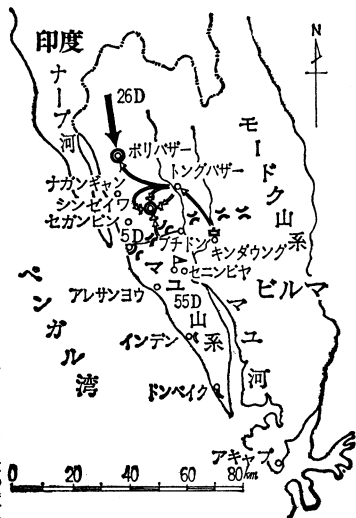
力は約二〇％内外に止まつた。第二十八、第三十三軍の新設は第十五軍に対するこの種兵力の配当を一層圧迫した。しかも遠方から転用される部隊は、まだ第十五軍の手許に到着していないものがあつた。この兵力不足に加えて、第十五軍の越境戦法が補給上の危険性を大きくした。部隊が携行する弾薬と二十日間の糧秣だけで急襲突破に成功することを絶対の前提としていた。若し進攻作戦が長引いたり蹉跌した場合は、軍主力は補給杜絶のまま、敵中の峻峻に立往生する危険性があつたのである。しかし当時必成を確信し切つて、第十五軍司令部は、この懸念を取って度外視していた。

〔ハ号作戦——第二次アキヤブ作戦〕 イムパール進攻作戦を主軸とするビルマ方面軍の新作戦は、怒江、フーコン両作戦に次いでアキヤブ方面においても火蓋が切られた。即ち昭和十九年二月四日、第二十八軍は第五十五師団を以て「第二次アキヤブ」作戦即ちハ号作戦を發動した。かくて日本軍約一〇箇師団と米、英、支の連合軍二五乃至三〇箇師団との死闘の幕が全ビルマに亘つて開かれることとなつた。

ハ号作戦は作戦地域を概ねトンクバザー東西の線に限定された。その目的は当面英印軍第十五軍団の反攻準備を機先を制して攻撃し、英印軍をこの方面に牽制してウ号作戦を容易にせんとするにあつた。

その作戦要領は、これを二期に分けた。前期においてはマヌ山系東方の敵印度第七師団を南北より奇襲挾撃して撃滅し、後期においては師団の主力をナガンギヤン附近に反転して、モンドウ附近の敵印度第五師団を撃滅せんとするにあつた。この作戦は歩兵団長桜井徳太郎少将の率いる歩兵五箇大隊、砲兵一箇大隊兵員約三千五百名のなぐり込み作戦に始まつた。同部隊は疾風の如く二月五日にトンクバザーを屠り、直ちに反転してマヌ河を渡河しシンセイウに突進して印度第七師団の司令部を蹂躪した。第五十五師団長は桜井部隊

ハ号作戦要図 (昭和19年2月～3月)



の成功の報に接するや、ブチドン、モンドウに配備していた部隊を北進せしめた。印度第七師団の三箇旅団と印度第五師団の一箇旅団がシンセイウ盆地において腹背から包囲された。

〔敵の新戦法——立体戦術——解囲後退〕 敵兵約三千名、戦車百

台、自動車約千輛の敵が瞬間に我が包囲下に陥ち、奇攻を博するかに見えた。しかるに被包囲下の敵はその優勢なる火砲と戦車とを以て円筒陣を構成し、その間隙を豊富なる自動火器、火焰放射器を以て閉塞してしまつた。しかも絶対優勢なる航空威力を以て間断なく支援せられ、空中補給を受け、鉄桶の防壁を創りあげた。空中補給によるこの新戦法は日本軍の瞠目するところとなつた。少数の山砲しか持たない第五十五師団必死の反復攻撃も空しく損害激増するばかりであつた。敵将スリム第十四軍司令官は印度第二十六師団を増援し、更に英国第三十六師団を国境の掩護陣地に推進すると共に西阿第八十一師団をカラダン河谷に進め、活発なる反撃作戦に転じた。第五十五師団は今や腹背に敵五箇師団の反撃を受け、反対包囲に陥つた。補給の困難と相俟つて、戦況は悲観すべき状況に立至つた。二月二十六日、遂に涙を吞んでシンセイウ盆地の包囲を解き、作

戦発起前の陣地に撤退して態勢の整理を図った。かくの如く第二十八軍の作戦は英印軍を牽制せんとする目的の一部は達成し得たが、その損害は甚大に上った。

平面戦術と立体戦術の対決に関するこの教訓は、將に開始せられんとするウ号作戦指導に重大なる教訓を暗示していたが、憾むらくは日本軍に十分に感得されなかつた。第五十五師団防衛に移転するや、敵は我が陣地に近迫して猛攻を開始し、三月十日にはブチドンに敵手に委するに至つた。続いてモンドウ、マユ山系の我が陣地の一角に敵が滲透し、三月下旬モンドウ、ブチドンの線において寸土を争う激戦が展開せられた。

これがため將兵の損耗更に増加し、四月には更に敵新鋭兵団の攻撃が反復せられ、陣地の要部を奪取せられ戦勢憂慮すべきものがあった。マユ山系両側地区における彼我の作戦がかく推移しつつある時、カラダン河谷方面においても西阿第八十一師団が進出し要衝キヤクトウは一時その手に歸した。第二十八軍司令官は第五十五師団の後方要域たる同河谷の重要性に鑑みて、一支隊（木庭支隊）を編成し、同方面に作戦せしめた。

〔ウインゲート空挺兵団の侵入〕 ウ号作戦発起の日が数日に差し迫つていた三月五日以来、北ビルマに思いもかけぬ異変が起きつつあった。

イラワヂ河の東岸カーサ附近の林空地帯に、敵空挺部隊が続々降下していたことである。この報告は三月九日に至つて初めて第十五師団司令部からメイミョーの軍司令部に到達した。三月五日夜パウシン附近に不時着した一グラライダー塔乗員を訊問した結果判明したのである。グラライダー降下部隊は、たちまち飛行場を設定し、次いで輸送空輸機の強行着陸によつて急速に増強された。その一部はモール附近に進出しミートキーナ鉄道を遮断した。別の一部はウントウ——ピンレブ道に蠢動し始め、該地区の我が後方部隊は恐慌状

態に陥つた。

当初、軍はこの敵の実体を判断し得なかつた。挺進擾乱部隊と即断し、所在の部隊を以て輕易に掃蕩し得るものと誤算した。

豈図らんやこの挺進部隊は「印度第三師団」という秘匿名を持つ大兵団であつたのである。この兵団は又チンデツとも略称せられ、六箇の旅団から構成せられ、各旅団は四箇大隊編成であつた。

そのほか、固有の飛行部隊（戦闘爆撃隊、中型爆撃隊、輸送隊及び連絡機隊からなる）までも持つていた。そしてその指揮官は前年二月、北ビルマに侵入してきたウインゲート將軍で、降下した部隊は、その三箇旅団であつた。三月十一日まで、早くも九、二五〇名の兵員のほか、砲兵やジープ等も輸送された。

將軍はこの作戦の進捗に伴い、バコックにも一箇旅団を、最後にはメークテラにも一箇旅団を投下して、日本軍を中、北ビルマから敗走を余儀なくせしめんとする途程もない大きな計画を抱いていた。昭和十八年二月のウインゲート旅団の地上侵入は、実にこれが下準備のためであつたことが初めて想い合された。しかし敵降下二週間後においてもその全貌を把握し得なかつた。

〔敵情変化——決心変化なし〕 第五飛行師団の空中搜索やその後の断片的情報により、その兵力は輕視を許さないものなることが逐次判明したけれども、しかもなおこのような大敵とは考え及ばなかつた。そしてシンゼイワ盆地の教訓に疎い第十五軍の首脳は、我が勢力圏内に降下孤立せる敵の威力を輕視し、寧ろ各個撃破の好餌とさえ即断した。第五飛行師団にはウ号作戦を中止し、この降下部隊並びにフーコン方面の敵を撃滅する作戦に轉換すべきであるとの意見が抬頭した。しかし河辺 牟田口兩軍司令官は断乎としてウ号作戦を決行する決意を堅持した。

時あたかも我が第三十三師団は既にウ号作戦を発起し、トンザン附近に脱兎の如く突進していた。軍主力も、チンドウイン河畔にお

いて渡河準備を完了し満を持していた。

【対空挺兵団作戰——第三十三軍編成】 牟田口軍司令官は取敢えず第十八師団及び第十五師団の各一大隊を、次いで第五十六師団の一大隊を割いて現地に急行せしめ、敵空挺兵団の掃蕩に当らしめた。しかし群盲象を撫でるに似たその攻撃は悉く失敗に帰した。

第五飛行師団もまた主力を挙げて攻撃に努めたが、敵空軍と対空砲火の反撃きびしく、意の如き成果を収め得なかつた。

かくして失敗を重ねるうちにこの敵は強大なる兵団なる上に、火力と機動力共に極めて優れ、しかも豊富適確なる空中補給と空軍の作戰協力により密林内に自在の作戰行動を採り得ることが明かになつてきた。

更に三月中旬には兵力未詳の敵の一兵団がチンドウィン河上流シムカリカムテイ附近において同河を渡り、長駆モール方向に南下し、空挺兵団と合流する態勢を示した。この挺進兵団は第十六旅団でモールの西北方カラットを占領した。

敵の空挺作戰は爾後益々拡大せられ、各方面からする地上攻撃と相俟つて北ビルマ一帶の日本軍を一掃せんとするにありと觀察せられ、日本軍の不安を深めたが、三月二十四日、ウィンゲート將軍の墜死を報ずるデリー放送は、聊か日本軍の士気を鼓舞した。

ビルマ方面軍司令官は三月中旬、テナセリウムの防衛に任じていた独立混成第二十四旅団の主力及び第二師団の一部を抽出し、これを空挺兵団に対する攻撃のため急派した。更に第十五軍司令官をしてウ号作戰に専念せしむるため、独立混成第二十四旅団を直轄し、同旅団長統一指揮の下に、空挺兵団に対する作戰に当らしめた。

三月二十五、六日の兩日に亘る独立混成第二十四旅団の攻撃は失敗に帰した。方面軍司令官は事態の重大性に鑑み戦略予備の第五十三師団主力を更にモールに急進せしめた。同師団長は独立混成第二十四旅団を併せ指揮してこの敵に當ることとなつた。次いで四月八

日かねて懸案になつてゐた第三十三軍司令部の編成が令せられ、陸軍中将本多政材が軍司令官に親補せられた。かくて第三十三軍司令官は第十八、第五十三、第五十六師団をその隷下に収め、空挺部隊に対する作戰、フーコンの作戰並びに雲南の作戰を相當することとなつた。

【続くフーコンの苦戦】 一方フーコン方面の第十八師団の作戰も苦しい戦況が続いてゐた。マインカン附近の陣地も優勢なる敵の迂回滲透と敵戦車部隊の突進により、三月の初め放棄の余儀なきに至つた。同師団は敵の包囲を突破してジャンプ、キンタンの新陣地に転進したが、三月十日頃より早くも激戦が開始せられ、下旬にはこの要線の保持も困難となつてきた。

去る十月末以来、五カ月に亘り連日優勢なる敵と死闘を続けつつある第十八師団將兵の損耗と疲労とは言語に絶するものがあつた。歩兵中隊の兵力は五〇名内外に減少してゐた。ジャンプ、キンタンの要線において雨期を迎え、雨期間同線において敵と対峙して、軍主力のウ号作戰を容易ならしめんと企圖した第十八師団長の計画は、今や望み難い状況となつてゐた。

【空挺兵団侵入の影響】 この第十八師団の苦難は前述空挺兵団の降下によつて更に倍加した。同師団唯一の補給線が完全に切断されたからである。敵空挺部隊の降下は独り第十八師団の危急を加重したのみならず、第十五軍主力のウ号作戰の前途を左右する重大禍因となつた。その主なる点を列挙すると次の通りである。

一、ウ号作戰開始後シュエボー——カレワ道に転用する予定の補給自動車部隊がウントウ——ホマリン道間に閉塞せられ、イムバ

ール進攻部隊に対する補給難の最大原因となつた。

二、第十五、第三十三師団の一部兵力、独立混成第二十四旅団第五十三師団等イムバール方面に使用を予定若しくは可能なる兵力を吸収せられた。

三、第五飛行師団は全力を以てイムパール作戦に協力の予定であつたが対空挺作戦に吸収せられた。

かくて第十五軍はウ号作戦発起早々、フーコン、マニプールとミートキーナ沿線の三地域において米、英、印、支軍と三つ巴の戦線を形成することとなつた。

〔第三十三師団トンザンに敵を包囲す〕 敵空挺兵団の侵入と行き違いに、第十五軍のイムパール進攻も枯葉を巻く疾風の如く発展していた。第三十三師団は三突進隊に分れて突進を続けた。

歩兵団長山本少将の指揮する突進隊はカバウ谷地を北進し、三月二十六日にはモーレ、タウの堅塁を屠り、敗走する印度第二十師団をバレルに向つて進撃中、四月十日テグノパール敵陣地に阻止せられた。

師団主力の二突進隊は先ずテイデム、トンザン地区印度第十七師団を挟撃撃滅すべく、トンザンの北方と東側に殺到した。師団の砲兵及び工兵部隊の主力は正面からテイデムに向つた。両突進部隊は三月十五日から十八日の間、それぞれトンザンの東側及びシンゲルに進出した。千輦以上の自動車擁する印度第十七師団は、早くもトンザン南北地区絶壁の羊腸たる山腹道とマニプール河の峡谷内において、縦隊のまま我が包囲に陥つた。これが報告は各上級司令部を歡喜させた。

〔無念錯誤の連続——長蛇を逸す〕 しかるにはしくもここに無念極まる錯誤が相次いで起きた。その一は被包囲下敵第十七師団の心臓を刺す要地トイトム（トンザン東北側）に進出した中突進隊（歩兵第二百十四聯隊（聯隊長作間大佐）が錯覚を起したことであつた。即ち敵は既に北方に逸脱したものと信じ、トイトムの要点を捨てその東側の谷地に集結してしまつた。これに追及した師団司令部も同様であつた。気がついた時は既に遅く、トイトムは敵のため再占領されてゐた。敵第十七師団は我が中突進隊歩兵第二百十五聯

隊（聯隊長笹原大佐）のため、頭だけを押えられてのたうち廻つてゐた。

敵第四軍団は、印度第十七師団の解囲を企図し、戦車を有する第三十七旅団（印度第二十三師団所屬）を南下せしめ、我が左突進隊に対し、三月十八日早くも攻撃を開始した。我が被包囲下の敵第十七師団もまた脱出を企図し、その第四十八旅団を以て必死の反噬に出た。シンゲルを中心とする山腹道において激烈なる戦闘が惹起された。

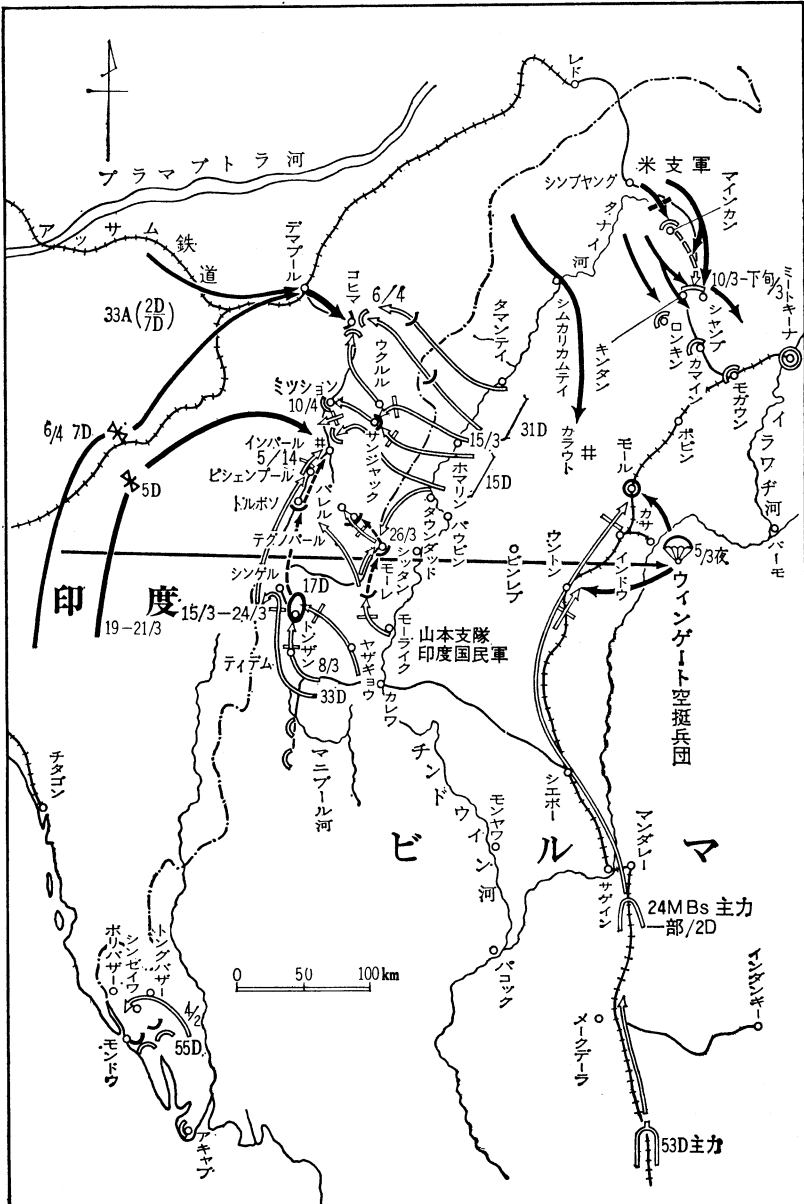
ここに第二の錯誤が起きた。柳田師団長は第一線から「暗号書を燃き軍旗を処理して玉碎覚悟で奮闘す」との報を「玉碎す」と勘違いした。苦戦の報に愕いた師団長は三月二十四日同縦隊の撤退を命じ、自ら窮鼠の敵に退路を開放した。かくて敵第十七師団は数百輦の火砲自動車を擁して、勿々イムパールに遁走しあたら長蛇を逸してしまつた。調査の結果、左突進隊の損害実数は一五%内外なることが判明し、上級司令部を一層切齒せしめた。

しかも第三の錯誤がこれに続いた。柳田師団長は補給上の必要から、直ちにイムパールに向つて敗敵を急追することを躊躇した。その上三月二十七日牟田口軍司令官に対して「即時ウ号作戦を中止して防衛態勢に転移するを可とす」との重大意見を具申した。その理由としては、トンザンの激戦に鑑み輕装備を以て、短時にイムパールの敵主力を屠ることは至難なること、並びにフーコン方面の戦況と空挺部隊の状況は北ビルマの防衛を危殆に陥らしむべきことを挙げた。時あたかも軍主力はチドウイン河の奇襲渡河に成功し、第三十一、第十五師団は弦を離れた矢の如く、コヒマ及びイムパール東北方に向いて峻嶺を突進中であつた。

〔ウ号作戦墜落の第一段階〕 牟田口軍司令官はウ号作戦の中核兵団長たる柳田中将が、進攻作戦の現況を無視して、突如かかる意見を具申し来れる真意の奈辺に存するやを疑い軍命令の服行をきびし

イムパール進攻作戦要図

(昭和19年3月～4月)



く督励した。

柳田中将は十日間前進を躊躇したる後、軍命令に促されて漸く決意を新たにして北進を開始した。この間敵第四軍団に態勢を再建する貴重なる時間を与えた。しかもその前進部署たるや軍司令官の督励に拘らず敵の反撃を虞れるの余り慎重なる統制前進を選んだ。当初軍が企図したイムパール平地への突進急襲企図は水泡に帰した。かくてウ号作戦は重大なる蹉跌の一段階を踏むこととなつた。

〔軍主力のチンドウイン河渡河〕 三月十五日、第十五軍主力のチンドウイン河奇襲渡河作戦は完全な成功を収めた。空地共に反撃は殆どなかつた。第三十一師団は三縦隊となりコヒマに、又第十五師団は有力なる一部の未到着を顧ることなく、三縦隊となつてインパール北方及び東方地区に破竹の勢いを以つて突進した。進路の大部は単独兵が辛うじて踏破し得る險路であつた。作戦発起に参加し得た第十五師団の兵力は僅かに歩兵六箇大隊と山砲一八門を基幹とするものに過ぎず師団輜重も追及中であつた。作戦準備を整える暇なく殆ど遭遇戦のように進攻を開始せざるを得ない実情であつた。その戦力は二分の一師団以下と見るのが至当と思われた。各師団は山砲兵中隊の編制を二門に減じ、その余力を以て彈薬を携行することとした。

第三十一師団の主力は、四月五日、早くもコヒマの東側に進出した。宮崎繁三郎少將の指揮するその一部は第十五師団の一部と協力し、サンジャック附近において英印軍一箇旅団を屠り、四月六日には要衝コヒマを占領した。当時コヒマには敵の微弱な守備隊と急派された挺進部隊所屬の二箇大隊が配置されたに過ぎなかつた。

スリム將軍は日本軍が一挙にコヒマからディマプールに突進して、アッサム鉄道——フーコン方面米支軍の兵站線——を遮断することを極度に虞れ、急遽第三十三軍団の英第二師団、次いで印度第七師団をディマプールに集結して、コヒマ奪還攻撃に向わせた。四

月五日にはその先頭部隊がディマプールに到着しつつあつた。

第十五師団の進撃も快調で、その挺進隊は四月八日、イムパール——コヒマ道山のミツシオンを占領した。師団の主力もまた四月十日にはイムパール北側及び東北側に進出し、イムパールを指顧の間に見下していた。

山本支隊はタム、パレルの間の峠にあたるテクノパールの力攻を反復中であつた。これより先同支隊は軍の直轄となつた。

〔第三十三師団長罷免更迭〕 独り第三十三師団は前述のような経緯から進出が遅れ、四月十日、漸くイムパール平地南方入口のトルボン隘路口に達しつつあつた。第三十三師団のこの遅延は軍司令官を痛く焦慮せしめた。この間、軍司令官と師団司令部間に激越な電報の応酬がかわされ、感情の対立が尖鋭化した。又師団司令部内においても師団長と参謀長間に、消極、積極兩論が激しく衝突して、師団長の統率は困難なる事態となつた。

五月初め遂に牟田口軍司令官は第三十三師団長の更迭申請の措置をとるに至つた。後任には馬占山討伐で驍名をうたわれた田中信男少將（六月に中将）が任命された。

〔空挺兵団の撤退〕 一方空挺兵団に対する作戦は第五十三師団の進出に伴つて面目を改めてきた。同師団は、五月初め戦場に進出し、五月十一日を期してモールの敵陣地に対して総攻撃を敢行すべく準備を進めていた。しかしこの総攻撃開始に先立つて空挺兵団は自主的に北方に後退した。第五十三師団は直ち敗敵を追うて北方モガウンに向つて進撃した。

5 イムパール作戦の頓挫

第十五師団戦力の劣勢、第三十三師団の蹉跌、敵空挺兵団による後方の杜絶と兵力の支分等幾多予期せざる齟齬や蹉跌や錯誤に拘らず、四月上、中旬の頃は目指すイムパール包囲の態勢が概成し、ウ

号作戦に輝かしい成功が予感された。

〔攻撃頓挫の兆〕 しかるに次の一句の後には形勢全く逆転し前途逆睹し難い状況になつてきた。即ち四月末から五月の初めにかけて同方面ともに戦況交綏の兆を示し始めた。空輸を以て日夜増援せられつつある敵第四軍団の抵抗反撃は漸く激化してきた。

北方コヒマにおいてもまた、我が第三十一師団は強大な敵第三十三軍団の攻撃に当面し攻守所を換え始めた。三週日を以て作戦を完うせんとする軍の企図は、既に四十日を過ぎたが早急には成功を望み難い戦況となつた。

しかも第十五、第三十一師団の駄牛の全数、駄馬の大半が進攻中既に斃死していた。進攻開始以来これらの師団は、一駄の軍需品の追送も受けていなかった。山砲の弾薬も殆ど尽きた。連日の激戦により将兵の死傷と疲労困憊は累加し、戦闘力は急速に低下しつつあった。チン高地の蕃族が峻嶺の陽向斜面に栽培する陸穂が、僅かに師団将兵の飢餓を支えた。戦況の急を訴え、弾薬の追送、飛行隊の戦闘協力を要求する師団の電報は、毎日のように軍司令官に打電された。

第三十三師団は補給に関しては他師団に比して良況であつたが、戦闘による損耗と疲労は劣らなかつた。四月末、各師団の戦力は四〇%内外に減少していた。

敵は四月中に七〇機を越える輸送機を以て、印度第五師団と莫大なる軍需品とをイムパール平地に空輸した。五月に入つてからイムパール——コヒマ道の打通を企図する敵の反撃は特に激烈を極めた。第三十一、第十五師団の諸部隊は敵に分断せられて孤立に陥り始めた。パール方面に突進せる山本支隊もまた、四月十日以来反復していたテグノパール堅陣の力攻もその効なく、五月末、その戦力は各大隊数十名に減少した。

印度国民軍第一師団は、四月以来山本支隊の戦線に参加奮闘していたが、この頃支隊の南翼において敵と対峙し敵の反撃を支えてい

た。

敵の歩砲飛戦車一体の制圧下に、我が軍は谷間谷間に伏し、戦闘行動の自由を持たなかつた。昼間は炊事は勿論、肌着を干すことさえ許されなかつた。僅かに夜間戦闘だけが日本軍に許される戦闘法であつた。しかもその戦果は天明と共に敵の砲爆撃によつて空しきものとなつた。

〔ビエンプールの総攻撃〕 牟田口軍司令官は五月上旬軍の主攻正面を第三十三師団方面に徹底するに決した。山本支隊方面から戦車、重砲兵聯隊が転用された。更に新たに配属された第五十三師団の歩兵二箇大隊をも増援した。そして自ら同方面に進出して戦闘の指導に當つた。

イムパール西南方約二〇軒にあたるビエンプール西側の山地沿いの地帯で、五月中旬以来、四十日間に亘つて我が第三十三師団の死闘が続いた。しかし戦線は一步もイムパールに接近しなかつた。乾坤一擲を期した軍の総攻撃は失敗に帰した。この方面の敵は空輸を以て増援せられた印度第五師団であつた。聯、大隊長の戦死相次ぎ、第三十三師団の戦力は三〇%以下に低下した。

〔作戦の転機失わる〕 ウ号作戦の進展に一抹の懸念を抱いた大本営は、秦參謀次長を南方軍総司令部及びビルマ方面軍に派遣し戦況の見透しを検討せしめた。次長一行は、五月初め、ビルマに到着し、本作戦の成功に大なる危惧を認めて帰京した。五月十五日大本営作戦室において次長が東條參謀総長を始め関係者に、この報告を実施せんとする矢先に、戦線を視察中の南方軍參謀よりこれと反対の報告がもたらされた。次長は南方軍參謀の報告をも酌量し、「イムパール作戦成功の算低下しつつあり」との前途の見込みに不安を示唆する報告を行つた。本作戦に非常な期待を寄せていた総長は、果、悲同様の報告により未だウ号作戦の実相を把握し得なかつたためか、なお本作戦成功に対する希望を捨て得なかつた。かくて本作戦

中止の一転機は逸せられた。

次いで河辺方面軍司令官は、六月初め病をおしてパレル戦線を視察した。帰途、六月五日インダンギーにおいて牟田口軍司令官に会し、第三十三師団方面の戦況報告を受け、戦況の容易ならざるを認めた。

しかし両軍司令官ともにパレル正面からの戦況打開に望みを嘱し、最後の努力を傾倒することを誓ひ合つて袂を別つた。六月九日方面軍司令官は、メイミューの第三十三軍司令部に立寄り、同司令部からマニラの南方軍総司令部に戦況を打電する共に、航空戦力就中戦闘機の増派を懇請したが、作戦中止の要を示唆する報告は遂に行われなかつた。

この頃、大本営作戦指導の焦点は、太平洋方面に転移し、既述の如く南方軍総司令部は、シンガポールからマニラに移動していた。大本営及び南方軍の関心は自ら比島方面十一号作戦準備にあつまつた。

かくてウ号作戦は、悲劇の終幕へと進行していった。

〔主攻正面の変遷〕 牟田口軍司令官は五月末、更に山本支隊方面において戦況を打開せんことを企図し、方面軍から新たに増援せられた第四師団の歩兵第六十一聯隊を同支隊方面に前進せしむる如く部署し、軍戦闘司令部をモーレに進めた。あたかも印緬国境は雨期に入り、河の氾濫、道路の崩壊等の兆が見え、アラカン山系を掩う雨雲險しく、軍の前途暗澹たるを思わせた。

〔第三十一師団の独断退却〕 このごろ第三十一、第十五師団長の軍司令部に対する補給要求は愈々激越となつた。五月末、第三十一師団長は遂にコヒマを放棄し補給を受け得べき地点まで後退することを報告し來つた。

この報告に驚愕した牟田口軍司令官は、今やウ号作戦は成否の関頭に在り、真に軍の危急存亡の秋なるを指摘して飽くまでコヒマを確保すべきを要求した。蓋し第三十一師団の後退はコヒマ——イム

パール道を解放し、全軍崩壊の因となること火を賭るより明かである。難局打開の唯一の方途は全力を挙げてイムパールを速かに攻略するにあるのみである。しかもこれこそ軍の絶対使命であると確信したからであつた。

しかし軍司令官の要求は佐藤第三十一師団長の容るるところとならなかつた。佐藤中将は六月初め師団の自滅坐視するに忍びず、自らその主力を提げ、一千五百名の傷病患者を擁して退却を開始した。歩兵団長宮崎少將の指揮する一支隊をコヒマ、イムパール道遮断のため残置したが、師団主力を以てしても支え難い敵の圧力に対して、それは宮崎支隊に望み難い使命であつた。

しかもなお、イムパール北方において第三十一師団と背中を合わせて悪戦苦闘しつつある第十五師団に対しては、何等の通報も行われなかつた。第十五師団当面の敵は六月に入り愈々増加し、当時戦車一五〇輛以上を有する二箇師団内外の圧迫を受けていた。師団長山内正文中将は病床に伏し、指揮を參謀長に委ねある有様であつた。

第三十一師団独断退却の報に接した牟田口軍司令官は久野村軍參謀長を同師団司令部に急行せしめた。久野村參謀長はフミネにおいて退却し来る第三十一師団長に会し、独断退却の連令を糾すと共に、「第十五師団の南翼に連つて、イムパール攻略の戦線に加入すべき」軍命令を傳達した。

佐藤師団長は軍よりの補給見込みなき現況において、軍命令を遵奉することは不可能なりと主張し退却を続行した。雨期は愈々最盛期に入り、大小の河川は氾濫し、道路は崩壊して印緬国境の地形はその相貌を一変しつゝあつた。

〔師団長の罷免——その例なし〕 ここにおいて牟田口軍司令官は佐藤中将の罷免を申請するの余儀なきに至つた。一方山内第十五師団長もまた病状篤きにより相次で更迭を上申することとなつた。河田槌太郎中将が佐藤中将の後任に、又柴田卯一中將が山内中将の

後任に補せられた。

竊に第三十三師団長柳田中将の罷免を見、今又他の二師団長の更迭行わる。大作戦の途上において、全師団長を更迭せしむるが如き不祥事にいたつたことは光輝を誇る日本陸軍史上嘗てその例を見ないところであつた。牟田口中将はその統帥の至らざるを自責し、河辺方面軍司令官に対し自身の進退を伺う措置をとつた。

「イムパール戦線の崩壊」 宮崎少将の犠牲的敢闘に拘らず、六月二十二日遂にコヒマ、イムパール道は解放されてしまつた。この日コヒマからイムパールに雪崩の如く突入した敵は、戦車、重砲、工作自動車等一千輛以上に達した。第十五師団は腹背に敵を受けその右翼は忽ち突破されてしまつた。しかもその背後連絡線たるウクル、サンジャック地区も將に敵のために蹂躪せられとする事態となつた。宮崎支隊の消息は絶え、その玉碎が憂慮せられた。今やイムパール平地の敵は倍加せられ、軍の北翼は崩壊に瀕し、軍は累卵の危き事態に立ちいつた。

牟田口中将は任務達成のため、退却しつつある第三十一師団を、改めて山本支隊の北側に転用して先ずパレルを攻略せんことを企図した。しかし既に軍紀崩壊に瀕し、又戦力恃むべきものなき有様では、その企図を実現する由もなかつた。

「ウ号作戦の中止」 ここにおいて軍司令官は遂に意を決し、六月二十三日初めて「万一攻撃を中止し防衛に転移せしめらるる場合に於ては軍の現状よりして印緬国境上の要線たるチンドウィン河西岸高地よりモーライク西北方高地を経てティデムに亘る線に後退せしめらるるを適当と思惟す」と、暗にウ号作戦中止を河辺方面軍司令官に具申した。

六月二十五日、この報告に接した方面軍司令官は牟田口軍司令官に対し「南方軍総司令官よりまだ何等命令無き現在、軍がかくの如き消極的意見を具申するは意外とする所なり一意軍の任務達成に邁

進すべし」と電命した。

方面軍司令官はかく第十五軍を鞭撻する一方、南方軍総司令官に對し情を具してウ号作戦の中止を申請した。この申請は直ちに南方軍総司令官及び大本營において認可せられた。かくて七月十日ウ号作戦中止の方面軍命令が第十五軍に伝達され、ウ号作戦発起前の防衛態勢に転移すべきことを命ぜられた。

三月八日以来四カ月余に亘つたイムパール周辺の激戦は、遂に敗北に歸し、我が壯図は空しく潰え去つた。

6 ジビユー山系への退却

牟田口軍司令官は方面軍命令に基き、七月中旬を期して、退却作戦に転移するに決した。

しかしながら本退却作戦は日本軍の史上に今まで嘗て経験のない困難な作戦たることが予想せられた。各師団は既述の如き難境にある上に、將兵は長期に亘る苦戦と補給の杜絶によりその疲労と困憊とは極度に達すると共に、各師団の患者はそれぞれ二千名内外にも及び、全兵力を以てしてもその担送は不可能なるものであつた。しかも第一線にある者の大半はアメーバ、マラリヤ又は脚氣の症状に冒されていた。

コヒマ—イムパール道の打通に成功した敵は、豊富なる地上、空中からの補給に依存し、我が敗勢に乘ぜんとするもの如く、その反撃は決河の勢に似たものがあつた。その兵力は六—七箇師団に及び、敵空軍の跳梁は雨雲を冒して全戦場を制し、昼間の行動は殆ど不可能に近かつた。

各部隊とも一切の駄馬駄牛を失い、車輛は道路の泥濘崩壊により行動全く不可能であつた。しかのみならず時あたかも雨期の最盛期にあたり軍の退路上にあるマニプール河、ヤナ河、ユワ河、チンドウィン河等の大河はもとより凡百の河床道は尽く氾濫奔流し、渡河

施設資材の見るべきものもなかつた。ジビュー山系に至るこの機動距離は実に五百〜一千軒に及ぶのである。更に困難なる要素は退路上に衛生補給の準備皆無なることであつた。

軍が退却に転移した場合、敵はチンドウィン河以西において日本軍の捕捉を企図し、同河に向つて一挙追撃してくるに必至と思われ、次でチンドウィン河以東に向う追撃は、雨期明けと共に新反攻態勢を整えて遂行するものと判断された。

【第一段退却——チンドウィン河へ】 軍は退却を二段に分けて指導した。第一段においては主力（第三十一、第十五師団及び山本支隊）を以てチンドウィン河西岸及びカバウ谷地のヤザギョウの線に、一部（第三十三師団主力）を以てティデムの線に向つて七月十六日より逐次開始した。

かくて第十五軍は万解の恨みをイムパールに残しつつ全線を挙げて退却に転じた。患者は独歩先行せしめたが独歩困難なる患者の大部は自決の途を選んだ。先行した患者は沿道の密林内に力尽き斃れるもの、濁流に吞まれて消息を絶つものその数を知らず、実に鬼哭啾々たる惨状を呈した。第三十一、第十五師団の規律と道義は崩壊の兆を示し始めた。

独り六月二十二日以来二十日間に亘つて消息を絶つていた宮崎支隊は、支隊長以下一丸となり、全患者を擁し、敵中を突破しつつフミネ南方に後退してきた。又田中新師団長に統率された第三十三師団は敵印度第五師団の急迫に對して果敢なる反撃を以てこれを阻止しつつ、鞏固なる團結を保持してトンザンに後退してきた。この毅然たる行動は全軍を感動せしめた。

八月中旬第一段の退却は辛うじて終了した。敵の追撃は愈々急にしてチンドウィン河の我が渡河点に溢出せんとする形勢を示した。カバウ谷地においても敵の東阿第十一師団が第三十三師団の背後連絡線たるカレミョウ、カレワ方面に先廻りする態勢を示していた。

【第二段退却——ジビュー山系へ】 ここにおいて八月二十日更に

第二段の退却に転じた。チンドウィン河を越えジビュー山系の要線に退却して、新防衛態勢に転移せんとする困難な退却である。チンドウィン河の河幅は千五百米以上に増幅し且つ渡河点は敵の砲弾と敵機の銃爆撃下に曝されている。五千名以上の重症患者が渡河点に蜷集して呻吟していた。

このような状況の下に八月二十五日の夜渡河退却が開始された。第三十一、第十五師団後衛部隊必死の敢闘と渡河作戦隊の奮闘によつて、八月三十日夜半、最後の一兵までチンドウィン河の東岸に移ることが出来た。

九月下旬、第十五師団はジビュー山系に、第三十一師団はサゲイン、マンダレーに向つて退却したが士氣と軍紀は最悪の状況に陥つていた。又通信器材の喪失により軍司令部と師団司令部の連絡は杜絶え勝ちであつた。

第三十三師団は腹背の敵を排撃しつつ依然至嚴なる軍紀と士氣とを堅持し、一切の兵器を搬送しつつチン高地の山系を退却中であつた。敵の一部は我が予期に反し引続きチンドウィン河東岸に滲透しつつあり、第三十三師団はチン高地に孤立する虞れがあつた。しかし軍は第三十三師団を救援する方途なく、ただ偏に同師団の勇猛なる敢闘精神に信頼し、独力敵の包囲を突破して撤退することを期待するのみであつた。

【我が損害——特に兵器の大部喪失】 当時軍内各師団、部隊の戦力はこれを把握するに術なき状況にあつたが、チンドウィン河を越えてイムパール作戦に参加した約一〇万名のうち約三万名を失ひ、ほかに約二万名の患者が随意に更に後方地区に撤退し、残存兵力は約五万名と推定された。しかも残存兵力の一半以上は病人であつた。なお兵器の損失は更に甚だしく、第十五師団の如きは歩兵大隊の残存兵器が重機関銃一、軽機関銃、擲彈筒各二、即ち歩兵一箇小

隊の裝備に匹敵する程度であり、小銃の如きも師団の総数約六百挺と報告せられた。
重要兵器たる火砲、自動車の損耗状況を例示すれば次の通りである。

部 隊 名	種 類	イムパール作戰 以前の数量	イムパール作戰 以後の数量
第十五師団	火 砲 自動車	三 三〇	三 六
第三十一師団	火 砲 自動車	三 三六	三 九
第三十三師団	火 砲 自動車	三 四三	二 三六
軍 直	火 砲 自動車	一〇 一九九	三 三五
備 考	一、第十五、第三十一師団の残存火砲、車輛はイムパール進攻の際、後方に残置していたものである。 二、第三十三師団の火砲及び軍直部隊の損失の大部は戦闘により破壊され、若しくは車輛砲兵なるため撤退不可能なりしものである。 三、自動車の損失は撤退不可能なるため自主的に破壊、遺棄されたものである。		

【軍首脳の更迭—軍の再建】 かくの如くイムパール作戰及び二月半に亘るジュー山系への退却により、第十五軍の戦力は崩壊

に瀕しビルマ防衛破綻直接の端緒となつた。

ここにおいて大本営はビルマ方面軍司令部及び第十五軍司令部及び同軍の各師団司令部首脳の人事を一新し軍を再建することとなつた。即ち九月から十月に亘り方面軍司令部においては方面軍司令官及び方面軍参謀長を更迭し、新たに木村兵太郎中将が方面軍司令官に、田中新一中中将が方面軍参謀長に補せられた。第十五軍司令部においては軍司令官、参謀長、主要幕僚の全員が更迭せしめられ、片村四八中将が新司令官に、吉田権八少将が新参謀長に補せられた。各師団もまた参謀長の全員が更迭せしめられた。

7 第二十八軍の作戰

【苦難増す第二十八軍】 ウ号作戰を始め北ビルマ、雲南省方面における險惡なる戦況はベンガル湾方面の防衛を担当する第二十八軍にも少なからぬ影響を及ぼした。即ち河辺方面軍司令官は、七月バセイン地区の防衛配備に就いていた第二師団と同軍自動車部隊の大部を第二十八軍より抽出して、第三十三軍方面に転用するの余儀なきに至つた。しかも第二十八軍は、先にアキャブ方面において敢行した反撃作戰が決定的戦果を挙げなかつた上に、第五十五師団の戦力は著しく損耗していた。

ウ号作戰により、マニ半島の敵第十五軍団の中、英印第五、第七師団等はイムパールに牽制し得たが、なおこの正面に英印第二十六師団、西阿第八十一師団のほか、増加兵団の到着が予想せられた。又第十五軍の敗退によつて、敵の反攻がアキャブ、イラワヂ河口方面正面に拡大せられる算が多くなつた。その上、イムパール方面から第十五軍に追尾しつつある敵が、イラワヂ河谷沿いにパコック、エナンジョン方面に滲透する懸念も増大した。

かくて第二十八軍は海岸方面のほか北方陸正面の防衛にも重大なる考慮を要する事態に当面した。その兵力は第五十四、第五十五の

二箇師団のみである。その防衛担任地域は南北六百料、東西二百料に上り、方面軍の死活を左右するエナンジョン油田地帯、バセインの穀倉地帯及び首都ラングーンを包擁している。ペグー山系、イラワヂ河、アラカン山系が併行縦走し、又バセイン、イラワヂ西河口の三角洲は、大沼沢地帯を形成し、兵力の運用を拘束することが甚しい地形上の特性を帯びていた。

〔完作戦計画に基く配備変更〕 第二十八軍は五月頃から情勢の悪化に対処するため任達達成の方策について創意を凝らし、部署の大変更を行つた。この新作戦を完作戦と名づけた。

即ちその作戦地域を持久地帯（主として海岸沿いの地域）、機動決戦地帯（北部バセイン三角洲地帯及びラングーン周辺地域）、反撃地帯（その他の全地域）に区分し、兵力の重点形成を図つた。マニ半島及びカラダン河孟（アキャブ、ラムレ島地区を含む）にはそれぞれ桜支隊（第五十五師団の約三分の一）及び松支隊（第五十四

第二章 雲南及び北ビルマの作戦

1 フーコン作戦の終焉

イムパール作戦が悲惨なる推移を辿り、西南ビルマの防衛が重大化しつつある時、フーコン方面及び雲南方面の作戦もまた極めて凄惨なる様相を呈しつつあつた。特にフーコン方面第十八師団の七カ月に亘る死闘も、六月末遂に空しく終焉し、ミートキーナの運命もまた旦夕に迫る等、ここに北ビルマは敵手に帰するに至つた。

〔最後の防衛線カマイン〕 即ち第十八師団主力は、昭和十九年四月十六日以降、五月末に至るまで、カマイン北方のワラ陣地線において死闘を反復した。この間第五十六、第二両師団から、それぞれ

師団の約三分の一を以て持久作戦に当らしめ、第五十五師団主力はバセイン地区に転進し同方面の防衛に当らしめた。第五十四師団主力はブロームータンガップ道以北のアラカン山系（含む）以東の地区の西及び北正面の防衛を担当した。

ラングーンは高射砲隊司令官吉田権八少将が高射砲隊及び兵站部隊を併せ指揮して、その防衛に當つた。エナンジョン油田地帯は第四十九師団の歩兵一箇聯隊を基幹とする部隊を以てその防衛に充當した。以上の配備変更は八月下旬に完了した。

マニ半島のモードク山系内に蟠踞した桜支隊（総兵力千五百名）は、三十倍に余る敵に対して果敢なる挺進、遊撃作戦を反復し、雨季明けまでブチドン東西の線を確保した。一方カラダン河孟の松支隊は、敵西阿第八十一師団と対していた。

註 イムパール作戦、雲南及び北ビルマの作戦並びに大陸打通作戦については、共に附図第六を参照せられたい。

歩兵二箇大隊が逐次増援せられ、更に二千名に達する補充員が到着した。しかし半歳に亘る死闘により、一箇中隊二、三〇名内外に減耗している師団にとつては焼石に水の類であつた。五月二十八日、敵がカマイン南方のセトン附近を扼するに及んで、第十八師団の運命は決し、師団は既にこれを排除する力も涸れ果てていた。

〔増勢する米支軍〕 一方米支軍は、五月中旬、空陸よりミートキーナに兵力を繰り出し、同地の守備隊もまた完全な包囲下に陥つた。その兵力は空輸により、増加せられて三箇師団に達した。抑々ステイルウェル大將は、四月三日マウントバツテン東南距最高指揮官からミートキーナの占領を命ぜられていたのである。彼はその任

務達成のため重慶軍五箇師団を与えられていた。即ちフーコン作戰の主役を演じた第二十二、第三十八師のほか、第三十、第五十、第十四師（四月中旬印度の空輸基地に到着）がそれである。その三箇師がミートキーナの攻囲に向つたのであつた。

即ち四月以降第十八師団は、一箇大隊数十名に消耗せる三箇聯隊と第二師団及び第五十六師団から増援された四箇大隊とを以て、前記重慶軍五箇師及び米軍一箇聯隊に相對し、しかも背後に侵入せる空挺部隊數箇旅団を背中に負うていたのである。

この空挺兵団は五月中旬ステイルウェル米大將の指揮下に入つたが、ステイルウェル大將の要望を無視し陸路印度に撤退し、その第七十七旅団のみがモガウンの攻撃に協力した。空挺兵団が全力を挙げて第十八師団を背後から攻撃していたならば、第十八師団の運命は尽きていたであらう。

〔第十八師団の転進——方面軍、軍の指導〕 五月二十七日、カマインに田中師団長を往訪したる本多第三十三軍司令官は、第五十三師団を以てカマイン、ミートキーナ方面における第十八師団の作戰に協力せしむる旨の意圖を明かにしたが、第五十三師団は、第十八師団の作戰に何等寄与するところなく終つた。

セトンの退路を遮断せらるるや、田中師団長は遂にカマインに転進するに決した。五月三十一日同司令官はカマインに先行した。しかし最後の陣地カマインも六月中旬には放棄の余儀なきに至り、各聯隊は四分五裂に陥り、今や組織ある戰闘は不可能となり、歩兵中隊の兵員は一〇名内外に減少していた。敵は続々モガウン、ミートキーナ方面に溢出してきた。

河辺方面軍司令官は六月中旬、情勢今や北ビルマを放棄するの余儀なきを認め、戦線をモニン東西の線に整理するに決した。本多第三十三軍司令官は、この方面軍命令に基いて、六月二十九日第五十三師団を以てモニン東西の線を占領せしめ、その掩護下に、イ

ンドウ北方地区に第十八師団を退却せしめた。

第十八師団は群る敵中を突破しつつ、七月十五日インドウに転進を終つた。時あたかも第十五軍がイムパールから退却を開始する直前であつた。第十八師団は前年十月末日以来の激戦に、將兵の大部を失つていたが、田中師団長の統帥の下、なお克く至敵なる軍紀と敢闘精神を失ふことなくその転進を完うした。

2 ミートキーナの失陷

〔ミートキーナの攻防始まる〕 五月十七日、敵はその地上挺進部隊を以てミートキーナ飛行場を奇襲しその占領に成功した。敵は間髪を容れず、飛行場部隊、高射砲隊及び歩兵部隊を同地に空輸しその後連日兵力の空輸が続行せられた。

註 抑々連合軍のミートキーナの攻略作戰について、四月初め頃まではステイルウェル大將とマウントバツテン提督との間に、根本的な意見の相違があつたことが戦後明かになつた。

即ち、マウントバツテン提督はモガウン、ミートキーナを占領し北ビルマを領有するためには五箇師団とバラシュート旅団一箇、挺進旅団一箇を必要とし、しかも一九四四年末まではその作戰の実施が困難である。その以後においてもこのような不健全な作戰を企図すべきでないとの意見を主張した。しかし統合參謀本部及びステイルウェル大將は、ミートキーナ作戰の必要性を強調し、これを固執した。作戰はステイルウェル大將の意見通り実行されたのであつた。

當時ミートキーナは、歩兵第百十四聯隊長丸山房安大佐の指揮する歩兵二箇大隊基幹の部隊のみで、その兵員は戰闘員七〇〇名、兵站部隊三八名、患者三二〇名であつた。そして主力は市街を準備し、飛行場は飛行場勤務部隊約一〇〇名によつて防備されていた。飛行場の奇襲占領に成功し得た米軍は、日本軍の兵力を輕侮し

て、性急な市街攻撃を開始したが、その攻撃は日本軍の反撃によつて、惨めに失敗した。この失敗が八十日間に亘る凄惨なるミートキーナ攻防線の端緒となつた。ミートキーナは、イラワヂ河とミートキーナ鉄道の終点とが交叉するところであり、北ビルマにおける印支空地連絡の要衝を占めてゐる。又バーモ、ナンカンを経て滇緬公路に連り、或は瑞麗河谷、騰越を経て保山に至る等、印支地上交通路の要衝でもある。若しひと度これを失えば、バーモの保持困難となり、第三十三軍の後方を危殆に陥らしめる。

第三十三軍司令部はミートキーナのこの重要性に鑑み第五十三師団の主力（歩兵四箇大隊及び砲兵二箇大隊）を以てミートキーナ方面の敵を背後より攻撃せしむるに決した。折悪しく、第十八師団はその後方セトンを敵に扼され重大危機に当面した。これがため第五十三師団のミートキーナ攻撃を中止し、反転してセトン攻撃を命令せざるを得なくなつた。

しかし第五十三師団がモガウンに反転した時には、既に同方面に溢出せる敵と随所に混戦に陥り、結局自ら奔命に疲れ果てることとなつた。次いで六月下旬から第十八、第五十三師団がインドウ方面に撤退し、モガウンが敵手に帰するや、米支軍の全圧力がミートキーナに集注せらるることとなつた。

第五十三師団方面に対しては敵空挺団と入れ換りに南下せる英第三十六師団が追蹙した。

〔ミートキーナ籠城——水上源蔵少将〕 これより先、本多軍司令官は第五十三師団を以てするミートキーナの解囲企図を放棄するや、第五十六師団の歩兵団長水上源蔵少将をして歩兵一大隊、山砲二門を率いてミートキーナに赴援せしめた。同少将は六月下旬、包囲下にあるミートキーナに到着し、爾後同地の全兵力を統一指揮し、籠城することとなつた。ミートキーナの兵力はこの増援によつて三千名内外となつた。しかし守備隊は、第十八、第五十六師団

及び飛行場部隊、後方勤務部隊等雑多の混成部隊より成り、水上少将の統帥は困難なる要素を包蔵していた。

本多軍司令官は、雲南方面に攻勢をとり、ナンカン、バーモの防備を固める作戰計画を樹てた。これがためミートキーナを極力永く保持して、フーコン方面から南下せる米支軍と雲南方面重慶軍との合流を阻止せんことを企図し、水上少将に対し次の如く死守を命じた。

一、軍は主力を以て竜陵正面に攻勢を企図しあり

二、バーモ及ナンカン地区の防備未完なり

三、水上少将はミートキーナを死守すべし

典型的な古武士の風格を持つ水上少将は、この軍命令を謹承し、次の如く返電した。

一、軍の命令を謹んで受領す

二、守備隊は死力を尽してミートキーナを確保す

本多軍司令官は水上少将の武徳に深く信頼し、同地は少くも一箇月内外は保持し得るであろうと期待した。

米軍の攻囲兵力は重慶軍三箇師のほか、有力なる米軍工兵隊及び一部米軍歩兵部隊により増強されていた。

〔最後の死闘〕 ミートキーナの市街を繞る攻防戦は文字通り寸土を争う死闘となり、米軍は遂に坑道戦法を併用するまでに至つた。

一時は米支軍首脳をして戦局の前途を絶望視せしめたほどであつた。

七月十二日にはB二九約四〇機と優勢なる戦闘機隊との支援下に、米支軍の総攻撃が行われたが、我が守備隊は克くこれを撃退した。しかしながら増援も補給も既に杜絶し、連日の敢闘により死傷続出し、陣地もまた砲爆撃のため崩壊し、ミートキーナの保持は愈々困難なる状況に立ち至つた。七月中旬までに我が守備隊の損害は実に戦死七九〇名、負傷者一、一八〇名に上り、戦闘力は今や極限

に達した。七月下旬、水上少将は、同市の保持も今や数日の余命に過ぎぬことを自覚し、患者を筏に乗せてイラワヂ河を下航し、バーモに撤退せしむる措置を進めた。八月初めミートキーナの陣地は逐次蚕食せられ、遂に最後の段階に達した。

八月二日から三日夜にかけて、同少将は丸山大佐をして軍旗を捧持し、約八百名の将兵を率いて東岸に、又患者は筏によりバーモに脱出せしめた。少将は更に本多軍司令官に対して次の如き訣別の電報を打つた。

一、小官の指揮未熟にして遂にミートキーナを確保する能はず最後の段階に達したるを御詫び申す

二、負傷者は万難を排して筏によりイラワヂ河を下航せしむるにつきバーモに於て救助せられ度し

以上の処置を完了したる水上少将は、独り同地に踏み止まり、河岸の密林内で去り行く部下将兵の前途を祈りつつ従容として自決した。丸山大佐は三週間後に、部下と共に軍旗を捧じてバーモに辿りついた。八十日に亘る我がミートキーナ守備隊の勇戦敢闘は敵将兵の心胆を寒からしめた。

註 本戦闘における米支軍の損害は死傷(病)実に六千五百以上に達した。

印支空輸総量は五月の約三千七百噸より七月には約二万五千五百噸に急増した。これがため存華米空軍の活動は活発となり、重慶政権の抗戦士気をたかめた。

3 雲南正面第五十六師団の奮戦

(遠征軍の雲南総反攻開始) これより先五月上旬、ウ号作戦漸く交綏の兆を示し、敵空挺兵団に対する攻撃は頓挫を重ね、又フーコン戦線も崩壊に直面し、方面軍を始め、第十五、第三十三軍は、挙げてこの方面の戦局打開と救援とに躍起になっていた時、雲南方面

の重慶軍は、あたかもその虚を衝かんとするものの如く、猛然全面反攻を開始してきた。

即ち五月十一日夜、遠征軍第二十集団は、一斉に怒江を越えて攻勢に転移した。その主力四箇師は騰越北方地区に、一部各一箇師は拉孟地区及び平戛地区に立ち向つた。当時遠征軍は第十一(九箇師、第二十(四箇師)の兩集団及び第八軍(三箇師)より成り、なお昆明周辺には数箇師に上る蔣介石の戰略予備軍が控えていた。これに対する日本軍は松山祐三中将の指揮する第五十六師団のみであつた。しかもその約三分の一は北ビルマの作戰に赴援していた。

當時師団は、平戛(歩兵一箇大隊及び砲兵一箇中隊、拉孟(歩砲兵各一箇大隊、竜陵(歩兵一箇大隊)、クンロン(搜索聯隊及び歩兵一箇中隊)、騰越等の反撃拠点を確保し、予備隊を鎮安街、バーモ附近に集結して随時反撃に出る態勢をとつていた。

(第五十六師団の反撃——内線作戰の妙) 松山第五十六師団長は、敵渡河開始の報を得るや、先ず一部を以て河岸の反撃を行い、次いで高黎貢山系においてその進出を阻止せしめた。この間各方面より兵力を抽出して、最も果敢なる反撃作戰を敢行し、敵を一時同山系以東に駆逐した。

六月一日、師団が騰越東北方において漸く反撃に成功せんとする折柄、敵第二十集団は四箇師を以てビルマ公路南方拉孟、平戛間において怒江を渡河した。その主力は奥深く竜陵に突進し、一部は拉孟の攻撃に向つた。今や重慶軍の反攻は、雲南の全正面に亘つて、雪崩の如き勢いに發展した。

松山師団長は北方正面は持久に転じ、南方正面に攻勢をとるに決した。即ち騰越に、歩兵第四百四十八聯隊長蔵重大佐の指揮する歩兵一箇大隊及び砲兵一箇中隊を残置して敵第十一集団軍に對せしめ、自らは主力を提げて反転、先ず竜陵を包囲しある敵を、次いで返す刀を以て竜陵、芒市間に滲入せる敵を電撃的に襲撃掃蕩した。引続

き七月上旬、平戔に向つて突破作戦を遂行し、同地守備隊補給の難を救つた。五月十日以来、二カ月に亘る同師団の作戦は、兵力の絶対的懸隔と地勢の險難とにより敵に決定的打撃を与え得なかつたとはいへ、八方から浮塵子の如く群がる大敵に対し、文字通り燕返し

の戦法を以て内線作戦の妙を尽した。
因みにこの師団は第十八師団と共に北九州において編成せられ、しかも昭和十七年五月以来、雲南省の防衛を担当し、松山師団長統率の下に、この戦場は師団の練兵場であると豪語するまでに必勝の自信に燃えていた。十数倍の敵に対しかくの如き善戦を遂行し得た所以は実にここにあつたのである。

4 断第一期作戦

〔方面軍の新作戦指導〕 六月下旬河辺方面軍司令官は、中、北ビルマのかかる戦況に鑑み、チンドウィン河及びフーコン方面においてその戦線を収縮して守勢に転換し、雲南正面において積極的反撃作戦を遂行して印支ルートの遮断を続行せんとする決心を選んだ。本作戦は断第一期作戦と呼称された。

既述した第十五軍のジビュー山系への撤退と第十八師団のインドウ転進は、この決心に基いて指導せられたものであつた。その計画の要旨は次の通りである。

- 一、雲南方面に於ける攻勢の爲第二師団及び第四十九師団の一部等為し得る限りの兵力を此方面に増強し重慶軍を反撃撃潰す
- 二、フーコン方面の戦線を撤しインドウ北方地区に於て敵を阻止す
- 三、イムパール方面の戦線を撤しインドウの新戦線に連繫しジビュー山系を経てカレワ、カンガウの線に於て敵を阻止す

〔第三十三軍の作戦計画〕 右方面軍の計画に基き本多第三十三軍司令官は、七月中旬新作戦計画を確立した。

その作戦方針は「主力を芒市周辺に集結し竜陵周辺に増集しある敵の遠征軍主力を撃破し怒江の線に進出して拉孟、騰越両守備隊を解圍救出し以て印支ルートの遮断を完うする」にあつた。

その要領は概ね次の通りであつた。

- 一、第五十六師団を以て芒市東北側に於て攻勢を準備せしむ
 - 二、第二師団を密かに芒市西南側に集結し第五十六師団と併立して攻勢を準備せしむ
 - 三、第十八師団をしてインドウ正面の守備を第五十三師団を交代してナンカンに転進しミートキーナ方面の敵に対して印支ルートを遮断せしむ
 - 四、バーモは第二師団の一部を以て之を確保し第十八師団の転進を掩護せしむ
 - 五、軍主力の攻撃開始を九月初頭と予定す竜陵周辺の敵主力を撃破せば先ず拉孟に突進し同守備隊を救出し次で騰越方面に攻勢を採り同地守備隊を救出す
 - 六、此の攻撃目的を達成せばミートキーナ方面米支軍主力に対して攻勢を採りバーモ、ミートキーナ両守備隊を救援し印支ルートの遮断を強化す
- この計画に基き、第二師団の一部及び搜索聯隊、兵員約一千二百名を以てバーモを占領せしめ、師団主力は八月二十八日、芒市に推進せしめた。第十八師団は八月下旬、逐次ナンカンに到着しつゝあつた。この間平戔、拉孟、騰越、竜陵の各拠点は絶対優勢なる敵の重圍に陥り、その戦況は惨絶を極めていた。第五十六師団は第十八師団方面から復帰した歩兵第百四十六聯隊と芒市守備隊を反撃戦力として同地に掌握していた。
- この頃ミートキーナ鉄道沿線地区の第五十三師団はインドウ北方において新たに進出せる英印第三十六師団と対峙していたが、補給難と悪疫のため、その戦力は極度に低下しつゝあつた。

〔電陵の攻撃〕

九月五日払暁、第三十三軍主力の断作戦の火蓋は切られた。第五十六師団は左第一線兵団として滇緬公路以西の敵を、第二師団は右第一線兵団として同公路以東の敵を攻撃した。その攻撃兵力は軍の予備隊を合して一万五千人を越えなかつた。当面の敵は五乃至六箇師を以て同市を猛攻中であつた。第一日の攻撃は概して順調に進展したが、第二日以降四日間に亘る攻撃に次ぐ攻撃に拘らず、敵の主陣地線を抜く能わずして対峙状態に陥つた。当面の敵は七乃至八箇師に増加し、彼我の兵力比は、一対二〇に達した。更に敵の暗号電報解説により、蔣介石麾下最精銳の戦略予備たる第二百機械化師団が、昆明から西進しあることが確認せられた。

一方軍が救援を志す拉孟、騰越の戦況は既に逼迫し軍の現状を以てしては適時その救出を完うすることは今や望み難いことが明かとなつた。軍首脳の焦慮愈々大なる時、九月七日、十四日拉孟、騰越の守備隊より相次いで玉砕の悲電に接した。当時電陵攻撃部隊及びこれら各守備隊の総兵力二万一千名の中、死傷病七千二百名に達した。しかしながらこの間敵に与えたる損害は六万を越えるものと推測された。因みに敵の全兵力は二八万と推定されていた。

〔平戛救援〕 軍は騰越、拉孟既に陥ち、当面の敵を撃破することまた至難なる上、残る平戛守備隊の救出急を要する等の情勢に鑑み、九月十四日軍主力の攻勢を中止し、平戛守備隊を救援するに決した。

これがため第二師団をして当面の敵に対して持久せしめつつ、第五十六師団を以て平戛救援作戦を遂行せしめた。第五十六師団は第四十九師団の歩兵第六十八聯隊（聯隊長吉田四郎大佐）の協力を得、九月十六日攻撃を開始し、敵中を突破して遂に平戛守備隊を救出した。

かくて断作戦は敵に大損害を与え、又昆明方面の蔣介石の戦略予備軍の一部を吸引する等の戦略的效果を挙げたが、作戰目的を完遂

することが出来ずに中止の已むなきに至つた。

5 拉孟、騰越守備隊の玉砕

拉孟、騰越両守備隊將兵の勇戦敢闘は壮烈を極め、ミートキーナ守備隊のそれと共に当時、敵味方をして讃嘆せしめた。

〔拉孟の攻防——鬼神の姿〕 拉孟守備隊が二十数倍の敵の攻撃を受けたのは実に五月十日からである。同守備隊は野砲兵第五十六聯隊第三大隊長金光惠次郎少佐指揮の下、歩兵第五百五十六聯隊軍旗を中心とする集成の歩兵約二箇中隊、砲兵三箇中隊（十榴榴彈砲八門、山砲四門）及び工兵一小隊より成り、その兵力は約千四百名であつた。金光少佐は一兵より累進した將校で、責任觀念旺盛、沈勇にして、その陣頭指揮と部下に対する深い情けとは、將兵敬仰の的となり、上司の絶対信頼するところであつた。

拉孟は滇緬公路が怒江を横断する唯一の橋——惠通橋——を制圧する西岸の要害である。この陣地は昭和十七年六月以来構築せられ、特に昭和十九年三月、金光少佐が同地守備隊長として着任後、精魂を傾けて補強せられていた。約一軒平方のこの陣地は数条の鉄条網を廻らし、掩蓋陣地を以て固められ、糧食、彈薬、飲料水の準備も周到に整えられていた。これは守備隊長以下、文字通り夜を昼に次ぐ努力の結晶であつた。

拉孟の陣地を攻囲せる敵の兵力は常に一乃至二箇師に及び、しかも二——三週間毎に交代し、一刻も攻撃の手を緩めるところがなかつた。又敵の各種砲兵は二〇〇門以上に達し、協力する空軍は数十機に上ることが少くなかつた。猫額のこの陣地は二重、三重に包囲せられ、敵の砲爆撃と銃弾の果となつた。

守備隊長以下一丸となり、この優勢なる敵の攻撃を従容として迎え撃ち、機会ある毎に決死隊を以て出撃奇襲し、一度として戦況を嘆じたり、増援を懇請することなく、鬼神の姿となつて闘つた。僅

かに弾薬の欠乏を訴え、手榴弾の投下を懇請するに止まつた。

軍は直協飛行機四機を以て、手榴弾を投下し守備隊の勇戦に酬いた。これが軍として守備隊のために図り得た唯一のものであつた。

〔**壮絶鬼神も避く**〕 片眼、片手、片脚をのこす守備隊將兵は尽く第一線に進み出て奮戦した。弾薬の不足を補うため夜間、陣地前に累々と遺棄せられた敵の屍から手榴弾を漁つて使用した。その凄絶なる姿は真に阿修羅漢の如く、鬼神も避くる態のものであつた。日々守備隊から寄せられる電報は軍の首脳を感動せしめ、南方軍の全部隊に通報せられて將兵の士気を感奮せしめた。

拉孟守備隊の報告電報中次の一例は、鬼神にも優る將兵の姿を偲んで余りあるものである。

一、本日中空投を感謝す

將兵一同手榴弾を合掌しつつ一発必中の奮闘をなしつつあり負傷者約五百（七月下旬）但し片眼片手片脚のものは皆火線にありて奮闘しあり

二、昨夜歩砲兵各部隊より挺進斥候十組を潜入せしめ敵砲四門、迫撃砲三門を爆砕重機二両獲せり七組は無事帰還す

三、我が飛行機が勇敢なる低空飛行（筆者註、弾薬を投下する為）を実施し之が為敵火を被るは守備隊將兵の真に心痛に堪へざる所余り無理なきやう願ひす

三カ月の死闘の後、陣地の西南方拠点は遂に敵手に陥ちた。火砲、重火器の大部は敵火に破壊せられ、生存者の数も半減した。次いで東南の拠点も守兵の全員が斃れて失陥した。僅かに西北部の複郭陣地に嚙りついて最後の死闘が継続せられた。九月十日、それは敵の攻囲開始以来実に百二十四日にあつてゐた。守備隊長金光少佐から最後の悲電が松山師団長と本多軍司令官の許に寄せられた。

一、五月十日以来百二十日に亘り陣地を死守せしも小官の指揮未

熟にして弾薬尽き將兵殆ど死傷し遂に軍攻勢の支撐たり得ずして最後の時に至れり軍旗暗号を焼却し全員玉砕せんとす

二、軍司令官師団長閣下より長期に亘り特別の御配慮を賜り一同感激に堪へず尚今後とも戦死せし將兵の遺族をよろしく御願ひす地下に於て遙かに国軍の勝利を祈る

金光少佐は更に木下正己中尉を選び「敵中を脱出して拉孟守備隊全員に代つて百二十日の戦闘状況を報告し將兵の功績資料を呈出し出来たら遺族にも伝へよ」との任務を与え、軍司令官に派遣した。この中尉は千辛万苦の後、九月十八日、我が戦線に辿りつき、具さに報告を完うした。

〔**騰越守備隊——軍旗奉焼玉砕**〕 拉孟の壮絶なる戦闘の推移に併行して騰越守備隊も凄絶極まり無い死闘と、その最期を見ることとなつた。

騰越は七月上旬以来、敵の真面目なる攻囲を受けていた。守備隊は歩兵第四百八十八聯隊長藏重康美大佐指揮の下歩兵一箇大隊、聯隊砲一箇中隊、砲兵一箇中隊、工兵一箇小隊及び病院一から成り、その総人員は約一千五百名であつた。騰越は古城で堅固なる城壁に囲繞されてはいるが、拉孟に比し、地勢に恵まれず又陣地の設備も薄弱であつた。

八月中旬、藏重大佐の戦死の後、太田大尉が代つて守備隊を指揮した。攻囲の敵兵力は二〇倍に上つてゐた。孤軍奮闘六十余日、九月七日頃、遂に城南の一角を失ひ城内に殺到した敵と凄絶なる白兵戦に陥り、遂に九月十二日夜軍司令官、師団長に対し、「軍師団の御期待に背き奉り申訳なし軍旗を焼却し全員敵に突入す」との訣別の電報を寄せ、最後の突入を敢行し九月十四日玉砕し果てた。

6 断第二期作戦

〔ナンカンにおける反撃企図〕 これより先第三十三軍司令部においては、八月初め、ミートキーナを占領した米支軍は南下してバーモ、ナンカンに迫り、竜陵方面から芒市、ナンカンに來攻しつつある遠征軍と呼応して、一挙印支ルートの打通を策することあるべしと判断し、バーモ、ナンカンの防備強化とこの敵に対する反撃作戦を準備しつつあつた。この作戦を竜陵における断作戦に対し断第二期作戦と呼んだ。

即ち八月下旬以来、ナンカンに集結しつつある第十八師団をしてナンカンの守りを固めしむると共に、既述の如く第二師団の一部を以てバーモの守備を固めさせていた。

軍の構想は竜陵における攻撃間（断第一期作戦）米支軍をバーモ、ナンカンの陣地に阻止する。次いで竜陵作戦終了と共に第五十六師団を以て芒市、竜陵方面において遠征軍に対して持久せしめつつ、第二、第十八師団を以て、その頃ナンカンの陣地に蟄集しつつありと予想せらるる敵を、ナンカン東北方地区より反撃せんとする巧妙なる内線作戦であつた。本内線作戦の軸心は、曉町、モンユ地区であつた。

しかるところ、ミートキーナを占領せる米支軍はその後南進の色なく、予期せる内線作戦の戦機は到來しなかつた。竜陵の戦線を撤収した第二師団は、ナンカン東北方瑞麗江の兩岸地区に亘る反撃態勢を固めつつあつた。第五十六師団当面の敵も断第一期作戦に豪つた甚大な損害を医するため俄かに動く気配がなかつた。

〔第三十三軍の兵力返還〕 時あたかも太平洋方面の戦局愈々急を告げ、七月のサイパン陥落に次いで、九月米軍のモロタイ、ペリリュー島上陸を見、今やフィリピン方面において彼我全力を挙げて戦争の運命を決すべき大決戦（捷一号）必至の情勢にあつた。

大本営及び方面軍の期待する如く、本年秋又は年末に至るまで印支ルートを遮断することは、現下敵の動向に鑑み、必ずしも困難で

ないと認められた。十月五日、本多軍司令官はかかる判断に基いて、方面軍司令官に対して方面軍全局の作戦に寄与せんがため、第二師団及び第四十九師団の一部（吉田聯隊）を進んで方面軍に返還せんことを申出でた。方面軍司令官はその申出を多とし、第二師団を十月十日頃よりマンドラレト方面に転用する準備を行う如く指示した。同師団は予定の如く中部ビルマに転進を開始した。

〔竜陵、芒市の撤退〕 十一月に入るや竜陵方面の遠征軍及びミートキーナ方面の米支軍ともにその戦力の補充回復を終えたもののようであり、再び活発な行動を開始するに至つた。即ち遠征軍は十一月一日より竜陵地区において米空軍支援の下に、三百門の火砲を並べて全面的攻勢を開始した。一方米支軍も南下し、十一月十五日よりバーモに対し、本格的攻囲に入つた。

本多軍司令官は第五十六師団に対し竜陵撤退の認可を与え、主力を以て芒市周辺において持久し、次いで曉町以北の縦深地帯において柔軟なる持久作戦を遂行する如く命令した。

第五十六師団の竜陵撤退に伴い、遠征軍は芒市に対する攻撃準備に移つた。敵の暗号解読により、その攻撃開始は十一月十八、九日の頃と判断された。十九日朝來予期の如く敵の攻撃が開始せられた。第五十六師団はこれと本格的決戦に入るに先だち、二十日夜半遮放峠に撤退した。

〔北ビルマの全戦局——敵の企図判断〕 これより先、第三十三軍司令部においてはミートキーナ方面米支軍の企図判断について「主力を以てバーモ、ナンカンに向ふべし」となす判断と「主力を以てモンミット方面に向ふべし」となす判断とが生じた。

当時第十五軍はジビュー山系の線に辛うじて転進を終り、十月下旬、第十五軍の指揮下に入つた第五十三師団もまたインドウ附近の陣地についていた。しかし当面の英印軍の追躰急なるのみならず、軍の戦力は既述の如く三〇%以下に低下し、これが再建は容易なら

ざるものがあり、ジビュー山系の線において英印軍を阻止することは望み難い実情であつた。しかも今や英印軍と米支軍は北ビルマにおいて連接し、第十五、第三十三軍の戦線は一連の戦線になりつつあつた。両軍の作戦地境は第五十三師団の指揮転移に伴い、概ねイラワヂ河の線に改訂せられていた。しかるに第三十三軍は、既述の如く主力を以て臘町を中心とする竜陵、芒市、ナンカンの地区にあり、第十五軍はインドウを右翼とするイラワヂ河西岸にあつた。

ミートキーナ—バーモ—ナンカン道とイラワヂ河によつて画せられた広大なる密林地帯は、敵のために解放せられていた。この地区はバーモ或はカーサ方面の敵が南下し、その中枢地モンミットを経て、中部ビルマの戦略中心たるマングレー、メイミョー地区に滲透し得、日本軍のため重大なる弱点を形成していた。

連合軍が一举、中、北ビルマの奪回を企図し、相呼応してマングレーに向ひ求心的に殺到するか、或は英印軍がマングレー反攻を担当し、米支軍と重慶遠征軍は先ず印支ルートの打通を完遂するためナンカン、セウウイ方面に進攻するかは、当時敵情判断上の重要な課題であつた。

〔バーモ救出作戦〕 第三十三軍司令部は前者の判断をとつた。これがため折角ナンカンにおいて作戦準備を整えつつあつた第十八師団の主力をモンミットに転進せしめ、ナンカンには同師団の一部（山崎聯隊）のみを残置した。先に第二師団を、今また第十八師団主力を抽出せられたため、ナンカン方面に対する軍主力の攻勢作戦は中止せざるを得なくなつた。

ここにおいて軍は山崎支隊を以てバーモ救出作戦を遂行することとし、本作戦を容易ならしむるため、第十八師団主力を以てモンミット地区より北方に攻勢をとり、敵を牽制せしむる如く作戦計画を変更した。

バーモ守備隊は米支軍主力の攻囲を遂え、支隊長以下一体とな

り、冷静沈勇、東北兵団の伝統を発揮し、敵に多大の損害を与へつつあつた。

本多軍司令官は、同守備隊の持久限度を概ね一カ月と考察し、十一月三十日、これが解囲作戦に関する軍命令を下達した。即ち山崎大佐をして集成歩兵四箇大隊及び砲兵一大隊を基幹とする部隊（兵力三千名）を指揮し、バーモ攻囲中の米支軍を急襲せしめ、バーモ守備隊またこれに呼応して内部より敵の包囲を突破脱出せしめんと企図した。

本作戦は、十二月九日奇襲を以て開始せられた。山崎支隊は数倍の敵に對し力攻を敢行した。攻撃は十五日に至るまで断乎として続行せられ、彼我の戦線は犬牙錯綜し混戦状態を示した。

一方バーモ守備隊は、十四日主陣地の一角に敵が侵入し、真に危機一髪るとき、山崎支隊の犠牲的救援に鼓舞せられ、同夜敵の一角を突破し、負傷者二百余名と担送可能なる一切の兵器を携行し、十七日夜、無事ナンカンに撤退集結を完了した。

山崎支隊は十六日夜、バーモ守備隊脱出成功の報を得たるを以て、直ちに戦線を整理しナンカンの陣地に帰還した。敵に与えた損害は二千と推定せられ、鹵獲又は破壊せる火炮は三十数門、機関砲三〇挺に達し、支隊の損害は死傷約四五〇名に過ぎなかつた。

7 第五飛行師団の奮戦

〔「ハ」号作戦協力〕 一方昭和十九年二月以来、アキャブ作戦に、北ビルマ対空作戦に、フーコン作戦に、雲南作戦に、更に「ウ」号作戦に、引続きその退却作戦に文字通り寧日なく作戦を連続しきたつた第五飛行師団の奮闘は、地上作戦にも増して困難を極めるものであつた。

先ず二月上、中旬、第二十八軍の「ハ」号作戦に對し、主として戦闘飛行隊を以て制空、地上作戦直協に従事した。就中シンセイワ

盆地の包囲攻撃にあたつては、二月二十一日、戦爆七五機を以て出撃し協力した。しかし大勢を左右することが出来なかつたのみならず、戦場近く基地を有する敵機のため我が損耗増加し、その作戦を一層困難ならしめた。

〔ウ〕号作戦協力 次いで三月九日、カーサ附近に敵空挺部隊降下の報に接し、これに対する攻撃を反復した。しかし時既に遅く、有効なる作戦を遂行することが出来なかつた。この間第十五軍の進攻作戦に協力するため、シルチャール、イムパール等敵戦闘機の基地を攻撃し、四月以降六月中旬に至る間、同軍の攻撃頓挫の兆を認むるや、これが打開に協力する作戦と敵空挺部隊に対する攻撃に連日全力を以て出撃協力した。しかしながら彼我基地配置と兵力の関係上、戦場在空時間に制限を受け、奮闘にふさわしい戦果を挙げ得なかつたが、その奮戦は地上部隊の士気を鼓舞すること大なるものがあつた。

〔戦力の減耗〕 その出撃延機数は、三月四一四機、四月五一九機、五月四五六機、六月一五二機、七月一二九機と漸減した。三月は

第三章 大陸打通作戦

1 作戦準備

既に述べたように昭和十八年末虎号兵棋の結果として、従来単に主任者間の腹案程度を出でなかつた大陸打通作戦はここに「一号作戦」なる作戦名称を以て省・部間の表面的議題となつて、その準備を一躍進せしむることになつた。

〔敵情〕 本作戦が考案せられるに至つた昭和十八年夏秋の候の中國方面の敵情は次の如くであつた。

「ウ」号作戦協力と対空挺攻撃相半ばし、四、五月は主力を以て「ウ」号作戦協力に、一部を以て対空挺攻撃にあたつた。六月以降、フロン、ミートキーナ及び雲南方面の作戦協力就中軍需品の投下に協力した。

三月以降の出撃機数が示す如く連日の困難なる作戦により、その戦力消耗急速にして六月末の可動機数は僅かに四九機となり、七月においては同時出撃可能機数は二〇機内外に減少した。

今や少数機を以てする遊撃的奇襲作戦以上を望むことが不可能な状況となつた。しかも昭和十九年一月下旬、重爆一戦隊を訓練のため内地に転進せしめられ、更に七月中旬、濠北方面の戦況急迫せるため、第七飛行団司令部及び重爆一箇戦隊を抽出転用せらるるに至り、第五飛行師団の戦力は愈々低下することとなつた。

一方ビルマ方面敵空軍の活動は四月においては、旬間二千数百機に激増し、雨季に入るもその活動減退せず、ビルマ上空の彼我航空勢力の懸隔は絶対的な状態となり、我が作戦を益々困難ならしめた。

即ち地上軍は重慶軍総兵力約三〇〇万、そのうち可動兵力約九箇軍二五万は主として貴州、湖南方面に集中しており、ビルマ方面に対する英米との連合反攻の関連については大いに注視を要するものとされてゐた。在華米空軍は既に約一三〇機を算するに至り、主として中国西南部の航空基地を利用してその活動は逐次積極化し来り、一方奥地華中、華北航空基地を利用する重慶空軍約二〇〇機とともにその勢力の伸張侮るべからざるものあるを感じしめられ、翌昭和十九年春夏の候に至れば、総兵力五〇〇機を越すものと判断せ

られた。特に米軍重爆撃機の逐次西南中国への増加は、我が本土防衛上一大関心事たらざるを得なくなつた。

なお未確認ではあつたが、華中、華南沿岸には敵潜水艦基地ありとの情報もあつた。

重慶側は従来の相繼ぐ敗戦により相当の痛手を蒙つてはいるが、この一兩年來の世界の情勢、太平洋戦局の推移、米國よりの物心の援助及び食糧、輕兵器自給自活の可能性等に鑑みて、継戦意志は必ずしも弱体化せざるのみか、却つて一層堅確化を加へつつありと判断された。

〔作戦開始前の派遣軍の状況〕 これに對し、支那派遣軍（總司令官畑俊六大將、總參謀長松井太久郎中將）の兵力は時に若干の増減があるが、二五師団、一戰車師団、一一混成旅団、一騎兵旅団及び一飛行師団で總兵力約六二万、自動車一万二千輛を擁し、飛行中隊数は時として、十數中隊より二十數中隊に達した。又昭和十八年末における支那派遣軍の集積彈藥は、約二〇師団分、自動車については、予備千五百輛、燃料は僅かに八カ月分をあますのみであつた。

敵がこの後その兵力、就中航空兵力を増加し得るに反し、太平洋及び南西方面における航空作戦の激化と国内航空生産状況等よりして我が航空兵力の中國方面への増加は殆ど期待し得ざる状況にあり、昭和十七年までの對華作戦において、常に絶對優勢の我が航空兵力を以て、制空權を完全に掌握していたのと比較し、まさに形勢は逆転していた。このことは予め覺悟していたことであつたが、一號作戦実施にあつたて航空自体はもとより地上作戦就中補給のため我が部隊の嘗めた労苦はまことに想像以上のものがあり、これは一號作戦を論ずるものの忘れることのできない重要条件である、現に昭和十九年夏第十一軍の衡陽に向う追撃の時期においては、敵の優勢なる航空下我が第一線も後方部隊も昼間休止して夜間のみ作戦を

強行せざるを得ない状況であつた。

支那派遣軍總司令官は昭和十八年初頭に受けた「概ね現占拠地域を確保安定し、且なし得る限り對敵壓迫を継続し、敵の継戦企圖の破潰衰亡に任ずると共に、在支敵空軍の活動を封殺すべき」任務に鑑み、昭和十八年秋季華北方面にあつては、組織的に共產黨軍の撃滅をはからしむると共に、漢口附近第十一軍の主力を以て十一月下旬より常德作戦を、南京、上海三角地帯の第十三軍の主力を以て、九月末より広徳作戦を実施せしめた。

又一般に防空を強化すると共に特に南方要域との我が海上交通は、支那大陸よりする敵空軍のため逐次妨害せられ、尚十一月末中國本土より台湾新竹に初空襲があつた。そこで十二月中旬、武漢地区より衡陽、遂川に對し次いで華南方面より桂林に對し連続航空進攻作戦を敢行（この間南方軍飛行部隊を以て昆明に進攻した）し以て敵航空の撃破を企圖し、相當の戦果を取めた。しかし我が戦力に鑑みるも徹底的戦果は到底望むべくもなかつた。

因みに彼我航空勢力逆転せるこの當時以降の航空進攻作戦は嘗ての重慶爆撃の如き昼間編隊爆撃等によつては徒らに損害をこうむるのみであつた。在華我が陸軍航空部隊、就中その輕爆撃隊がその後兵力の劣勢、裝備の劣等に對し創意工夫と訓練とを重ね屢々薄暮月明又は黎明を利用して行つた果敢な少数機による挺進奇襲作戦はたびたび奇功を奏したが、これもまた以て全般の態勢を改善するには由なかつた。

〔作戦目的——一號作戦〕 支那派遣軍においては以上の諸作戦を実施する間、常に先ず速かに重慶政權の衰亡、日華問題の解決を庶幾して重慶進攻作戦その他の構想を練つていたが、偶々昭和十九年初頭より京漢打通作戦を実施すべく数次に亘り大本營に意見を具申するところがあつた。

その目的とするところは華米空軍の増強に伴い長江補給路が脅

威せられるに至つたので、南部京漢沿線を攻略して、武漢地区に対する華北方面よりの連絡路を開闢すると共に華中、華北兵力の融通運用を容易ならしめ、且つ豊饒なる河南平地を領有して敵の継戦企図衰亡に資せんとするものであつた。

大本営においても昭和十八年秋以来、右と併行して中国において湘桂、奥漢線及び南部京漢鉄道沿線の要域を攻略すべき作戦の研究を実施していたが、虎号兵棋実施当時その作戦目的として次の四項目が考慮されていた。

- 一、今後日本本土攻撃のための、米航空「B二九」の基地となるべき桂林、柳州を我手に収め本土防衛を全うすること
- 二、桂林、柳州附近の確保により将来印度、ビルマ、雲南を経て華南方面に指向せられることあるべき敵の攻勢に対応すること
- 三、海上交通逐次不安となりつつある状況に於て、これ等南北に通ずる鉄道を補修して仏印を経て行ふ南方軍との陸上交通を確立すること

四、重慶軍骨幹武力の破壊と、綜合戦果により、重慶政権の衰亡を策すること

爾後各般の深刻な検討を遂げた結果、翌十九年一月に至つて我が能力に鑑み右の第一項のみに作戦目的を集約限定して、本作戦を実施することに決定せられた。

しかし作戦名称は全般を一号作戦、そのうち京漢作戦をコ号、湘桂作戦をト号と称呼することに定めた。

〔本作戦の問題点——世紀の大遠征〕 今日靜かに地図を展いて追想するとき、大東亜戦争の一こまにすぎぬ、一号作戦もまた、まことに世紀の一大遠征たるの感が深い。

中国大陸を南北に縦断することまさに一千五百料「作戦距離を細分すると黄河、信陽間は約四百料、岳州、諒山間は約一千四百料、衡陽、広東間は約六百料」この間我に数倍する蒋介石隷下の全野戦

軍の約半数を撃破して穿實的な作戦を行わんとするのである。しかも敵の制空權下幾多の苦難を克服し、更に日本のおかれた全般戦況の要請上この大作戦を敢行するため兵力の増加は固より緊要な資材の補給さえ、これを極度に圧縮しなければならぬ状況であつた。剩さへ従来对华作戦に慣熟した優秀兵団の大部は太平洋及び南西方面の戦況の進展につれ、次々に抽出転用せられ、訓練期間短く、且つ実戦の経験少ない装備の劣つた新編成兵団の多くを交えてこの作戦を遂行しなければならなかつた。

更に全般的に船舶が極めて逼迫不足している状況に鑑み、作戦準備及び実施にあたり外洋大型船舶の使用を極力減少しなければならぬ。これがため、上海、広東等に対する兵力、資材の海上集中輸送は種々の不便を忍んでもこれを極度に圧縮し大部は大陸鉄道によらねばならなかつた。

又自動車用揮発油は極めて不自由でしかも長遠な作戦路に人員約五〇万、馬匹約一〇万、自動車約一万五千、火炮千五百門を以てする連続作戦である。後方補給実施の巧拙は本作戦の成否を左右する。ここにおいてか燃料の節約のため大陸内の大小河川を徹底的に利用すると共に、成るべく速やかに、鉄道を修復して後方補給に利用するの着意を必要とした。しかしながら敵制空權下の水路利用は極めて困難であり、又鉄道は敵のため徹底的に破壊されていてこれを修理するためには多数の資材及び鉄道部隊を必要とするに拘らず、現下の状況ではこれまたその充足は容易ではなかつた。

これがため或は全中国における緊要でない支線側線を全部撤去したり、或は鉄道部隊の將兵の大部を鉄道未経験者を以て急速編成する等のことを敢えてした。更に折角修理した鉄道橋等も敵航空の爆撃に対して掩護することは決して容易なことではなかつた。

全中国及び南滿地区における患者収容施設の大拡張が必要でありマラリヤ、ペスト等、雨季、炎熱時の防疫対策にも遺憾なからしめる

要が殊に大であつた。

自動車部隊の大部はやむを得ず一時関東軍より転用したが、對ソ準備上の一大欠陥を形成するので作戰一段落と共に努めて速かに集結を必要とした。

以上の如く本作戦は規模極めて雄大であつたが、内部に幾多の障礙と危険とを包蔵していた。しかし大本營及び現地軍ともに赫々たる支那派遣軍の既往の戦果と伝統とに鑑み、当面の中國軍隊の撃破には常に満々たる自信を有していたのであつた。

〔大命下達〕 大本營は、一月二十四日支那派遣軍總司令官並びに南方軍總司令官に対し、次の要旨の命令を下達した。

一、大本營は西南支那に於ける敵空軍の主要基地を覆滅せんことを企図す

二、支那派遣軍總司令官は湘桂、粵漢及南部京漢鐵道沿線要域を攻略すべし

三、南方軍總司令官は支那派遣軍の右作戰に協力すべし
右と共に次の如き作戰要綱要旨を指示した。

一、作戰目的

敵を撃破して湘桂、粵漢及南部京漢鐵道沿線の要域を占領確保し以て敵空軍の主要基地を覆滅し其の跳梁を封殺するに在り

二、作戰方針

1 支那派遣軍は昭和十九年春夏の候先づ北支那方面より次で武漢地区及南支地区より夫々進攻作戰を開始し敵就中中央軍を撃破して先づ黄河以南南部京漢鐵道次いで湘桂、粵漢兩鐵道沿線の要域を占領確保す

作戰実施に伴ひ京漢及粵漢兩鐵道は状況之を許す限り復旧に努む

2 南方軍は支那派遣軍の作戰に協力する為ビルマ及印度支那方面より一部の作戰を実施す

三、作戰指導の大綱

1 京漢作戰

イ、昭和十九年四月頃北支那方面軍を以て北支那より作戰を開始し敵を撃破し黄河以南南部京漢沿線を占領確保す

主要作戰期間を約一ヶ月半と予定す

ロ、作戰使用兵力を左の如く予定す

北支那方面軍

第十二軍（四師団基幹）

第五航空軍の一部

ハ、右作戰の終了に伴ひ所要の兵力を陸路武漢地区を経て湘桂作戰方面に転用す

新占拠地域の確保兵力を約二師団と予定す

2 湘桂作戰

イ、昭和十九年六月第十一軍を以て武漢地区より

七、八月頃第二十三軍を以て広東地区より作戰を開始し敵を撃破して桂林及柳州附近を攻略したる後湘桂粵漢兩鐵道沿線の残敵を掃蕩して之を占領確保す

主要作戰期間を約五ヶ月と予定す

ロ、状況により爾後成るべく速かに遂川及南雄附近敵飛行場

群の覆滅作戰を実施することあり

ハ、次で状況之を許す限り昭和二十年一、二月頃第二十三軍を以て南寧附近を攻略し、桂林——諒山道を打通確保す

ニ、第五航空軍は第十一軍の作戰発起に先だち全力を以て敵空軍撃滅作戰を実施し初動に於て航空優勢を獲得し爾後敵

の抬頭を封殺すると共に緊要の時機所要の兵力を以て地上

作戰に直接協力す

ホ、作戰使用兵力を左の如く予定す

第十一軍

第七乃至八箇師団

第二十三軍 二箇師団

派遣軍直轄 一乃至二箇師団基幹

第五航空軍 飛行団二箇

へ、湘桂、粵漢兩鐵道沿線占拠地域の確保兵力を約八箇師団

四箇旅団基幹とし成るべく兵力の集結に努む

3 南方軍の策応作戰

南方軍は支那派遣軍の作戰に策応協力するためビルマ及印度支那より一部の作戰を実施す

4 兵站運用に方りては船腹の節約に努め特に果敢なる機動作

戰遂行のため雨季炎熱瘴癘の克服内陸水運の徹底的利用による陸路輸送力の節減現地資源及鹵獲資材の徹底利用に留意す

〔兵力資材の準備と企図秘匿〕

支那派遣軍は昭和十八年夏以来昭和十九年春に亘り大本營の命令に基き、南東太平洋方面に転用のため第十七、第三十二、第三十六師団を上海附近に、第三十五師団を青島附近に逐次集結し輸送を開始しあり、兵力は減少の一途をたどつていたが、今次一号作戰実施のため、新たに増強されたものは僅かに次の如くであつた。

即ち従来支那派遣軍總司令官の隷下にあつた第三飛行師団を第五航空軍（軍司令官下山琢磨中將）に改編し実働約二五〇機（予想敵機数の半数）となすほか、在滿二十七師団の転属、新たに独立歩兵旅団一四箇の編成、野戰補充隊八箇の派遣転属及び若干の軍直部隊及び兵站部隊を増加せられたのみで、他は派遣軍内の兵力の融通使用によりこれを忍ばなければならなかつた。

更に主要資材として新たに内地又は滿洲より追送を予定し得るのは、終始を通じて一般彈藥四師団會戰分、航空彈藥約二飛行団分、自動車燃料約四万軒、航空燃料約一万軒、渡河資材約六百隻のみであつて、その大部を三月乃至五月の間逐次追送し、概ね華中六、華南一の割合で集積を予定された。

大本營としては本作戰実施のため企図秘匿を特に重視し、当初は中國大陸における積極作戰企図を極力秘匿し、作戰準備の進捗に伴い重慶作戰を実施する如く欺騙し、且つ秘匿欺騙は作戰、政略、宣伝、防諜等各般に亘り中央現地統一した計画の下にこれを行う如く指導したが敵は概ね我が企図を察知していたものようであつた。

2 支那派遣軍の作戰指導

支那派遣軍においては大本營に基き、且つ大本營より示された作戰要綱に準拠し、更に細部に亘り計画を立案し、三月大本營に報告した。その大要は以下述べる通りである。

〔兵力運用〕 北支那方面軍（軍司令官岡村寧次大將）は第十二軍（軍司令官内山英太郎中將第三十七、第六十二、^註第一百十師団、戰車第三師団基幹）を以て作戰に任せしめ、同軍従來の占拠地域は方面軍直轄とする。

註 第六十二師団は本作戰で健闘後、沖繩に転用されて舊戰遂に玉碎するに至つた。

武漢地区より發進する第十一軍（軍司令官横山勇中將）は第三、第十三、第二十七、第三十四、第四十、第五十八、第六十八、第一百十六師団の九箇師団を基幹とし將來第三十七、第六十四師団を増加する。因みにこのうち第三、第十三師団は昭和十二年上海會戰以来の古豪兵団であり、第十一軍の中核兵団であつて對支作戰に關し其の精銳度は殆ど完全に近いものと認められていた。

広東地区より發進する第二十三軍（軍司令官田中久一中將）は第二十二、第二百四師団を基幹とする。

即ち支那派遣軍においては一号作戰使用兵団と現占拠地域確保所要兵力とを勘案し、作戰使用兵力を捻出して以上の如く運用することとした。この結果野戰補充隊の如き本来未教育兵の教育に専念すべきものまでこれを警備及び輕易なる作戰に使用しなければならな

かつた。

〔京漢作戰指導要領〕 北支那方面軍は四月上旬までに霸王城附近黄河鉄道橋の修復を完了し特にこれが防空を強化する。四月中旬第十二軍の主力を新郷南方地区、一部を開封西方黄河左岸地区に集中せしめ作戰準備を完整せしめる。四月下旬攻勢を開始し敵を撃破して鄭城附近に進出し洛陽方面に向ふ爾後の作戰を準備すると共に一部を以て信陽方面に進攻せしめ第十一軍の一部と協力し、武漢地区に至る陸路連絡線を打通せしむる。

第十二軍主力は爾後なるべく速かに鄭城附近より右旋回して洛陽方面に進出し敵第一戦区軍を撃滅する。この直前山西省にある第一軍の一部を以て適時垣曲附近より黄河を渡河し、隴海線を遮断して第十二軍主力の作戰に協力せしめる。

他方第十一軍は概ね五月上旬一部を以て信陽附近より礮山附近に向ひ北方に対して攻勢をとり、北支那方面軍の作戰に協力する。第十三軍は四月末頃一部を以て東方より敵を牽制し北支那方面軍の作戰を容易ならしめる。

関東軍より転用された第二十七師団は先づ黄河左岸に待機、作戰の進捗に伴ひ第十二軍の第三十七師団及び戦車第三師団の半部と共に、陸路武漢地区に推進し第十一軍の指揮下に入り爾後の湘桂作戰に備へる。

作戰終了後、北支那方面軍は概ね洛陽、臨汝、舞陽及び泌陽東方の線を對敵第一線として南部京漢鉄道沿線の要城を確保すると共に、機を失せず鄭州、洛陽、鄭城附近に飛行場を設定し且つ南部京漢鉄道を成るべく速かに修復する。

湘桂作戰指導要領

一、前段第一期作戰（衡陽攻略）

第十一軍は五月下旬迄に岳州周辺の地区に集中し作戰準備を完成する。

六月初頭頃軍主力を以て湘江東方地区から、一部を以て洞庭湖方面から攻撃を開始し敵第九戦区軍を撃滅して、速かに長沙附近を攻略する。次で機を失せず長駟衡陽附近を攻略すると共に常德方面より予期する敵第六戦区軍の側撃を適時撃破する。衡陽攻略は七月中旬頃と予定する。

爾後第十一軍は衡陽附近以北湘江沿線地区の殘敵を掃蕩し湘江沿線の要城を確保すると共に祁陽、来陽線を對敵第一線として桂林方面に対する爾後の作戰を準備する。湘潭附近以北の要城は逐次戦場に到着する後続兵团を以て確保する。

第十一軍は作戰の進捗に伴ひ機を失せず長沙、湘潭及び衡陽附近に飛行場を設定すると共に北部粵漢鉄道特に長沙附近迄を速かに修復し、兵站自動車道の新設改修と相俟ち後方推進を容易ならしめる。

第十三軍（軍司令官永津佐比重中將）は六月上旬末頃一部を以て金華正面より衡州附近に対し攻勢をとり敵第三戦区軍を牽制して第十一軍の長沙附近に於ける作戰を容易ならしめる。

第二十三軍は六月末頃有力なる一部を以て、北江に沿ふ地区に攻勢をとり敵第七戦区軍を牽制し、第十一軍の衡陽附近に於ける作戰を容易ならしむると共に、梧州方面に対する軍爾後の作戰を準備する。

二、前段第二期作戰（桂林、柳州攻略）

第二十三軍は七月下旬頃主力を以て、西江兩岸地区より、一部を以て雷州半島方面より攻勢を開始し、敵を撃破して梧州、丹竹附近を攻略し同地附近以西西江沿線の要城を確保すると共に柳州方面に対する爾後の作戰を準備する。

第十一軍は衡陽附近に於て戦力を充足する間、適時有力なる一部を以て宝慶及び零陵を攻略し爾後の作戰を容易にする。

八月中旬頃第十一軍は湘桂鉄道沿線地区より、第二十三軍は西

江沿線地区より求心的に攻勢を開始し、敵第四戦区軍及び蟬集する敵軍を撃滅して夫々桂林及び柳州を攻略する。その時機は概ね九月下旬頃と予定する。

爾後兩軍は殘敵を掃蕩して夫々湘桂鐵道及び西江沿線の要域を確保して爾後の作戦を準備する。

作戦の進捗に伴ひ零陵、桂林、來賓、柳州附近に夫々飛行場を設定し、又第十一軍は湘桂鐵道の修復、第二十三軍は西江の啓開及び陸路兵站の設定に依り後方補給を容易ならしめる。

三、前段第三期作戦（南部粵漢線打通）

第十一軍は第二期作戦間、衡陽附近に配置する兵団をして南部粵漢沿線の攻略に関する諸準備を実施せしめ、更に軍が桂林を攻略後直ちに所要の兵団を零陵附近に反転せしめて、第三期作戦を準備せしめる。

第二十三軍も亦柳州を攻略後、直ちに一部を広東附近に反転せしめ第三期作戦を準備せしめる。

十月頃第十一軍は有力なる一部を以て衡陽及び零陵附近より攻勢を開始して、敵第七戦区軍及び殘敵を撃滅して南部粵漢鐵道沿線の要域を占領確保する。本作戦期約一ヶ月と予定する。第二十三軍は一部を以て広東北方地区より英德附近に向ひ攻勢をとり、第十一軍の作戦を容易ならしめる。

第十一軍は本作戦実施にあたり省境附近鐵道橋及び鑿道の急襲占領に努むると共に、作戦の進捗に伴ひ南部粵漢鐵道を修復する。又柳州及び韶州附近に飛行場を設定する。

敵空軍依然として遂川、南雄附近を利用する場合には、爾後成るべく速かに或は又為し得れば本作戦と同時に遂川、南雄附近の敵飛行場群を覆滅する。

四、後段作戦（南寧攻略、仏印打通）

昭和二十年一、二月頃第二十三軍は柳州南方地区から攻勢を開

始し、南寧を攻略したる後、諒山附近仏印国境に至る陸路連絡線を打通する。南方軍はその隸下の印度支那駐屯軍を以て、諒山方面より本作戦に策応せしめる。第二十三軍は作戦の進捗に伴ひ南寧附近に飛行場を設定する。

以上全期間を通じ第五航空軍は適時進攻して敵航空勢力を撃破し、又地上作戦に直接協力する外特に作戦準備間に於ける集中輸送就中楊子江及び華南に対する沿岸船舶輸送の掩護に任ずる。

支那派遣軍総司令官は五月下旬自ら漢口に進出してここに前進司令部を設く、次で前段第二期作戦にあつては衡陽附近に之を推進して第十一軍及び第二十三軍に対する作戦指導を行ふ。

支那派遣軍は以上の如き策案に基き、隸下各軍に対し任務を示し、銳意作戦準備に没頭した。

3 京漢作戦——コ号作戦

〔作戦開始前の彼我の状況〕 京漢線黄河渡口たる霸王城の鉄橋は敵の砲撃により破壊されていた。北支那方面軍はかねてより一部の兵力を南岸に配置していたが、新たに関東軍が対ソ戦の場合を予期して集積して置いた重構桁三五組、同架設機一機の移管を受け、又工事を担当した鐵道第六聯隊長以下の異常なる努力によつて、三月二十五日遂に三千米余の大鉄橋の修復完了し、北支那方面軍以下大いに爾後の作戦遂行に関し自信を加ふるに至つた。

又華中方面においては、あたかも楊子江の増水期に入り運航能率大いにあがり、江岸陸路集中も概ね順調に進捗した。

華南方面沿岸輸送は艦船護衛の關係上能率必ずしも所望の如くならず、約半カ月程度遅延の已むなき状態であつた。

一方第五航空軍は華北においては彰德、徐州、新郷、開封等を基地とし、特に一部の戦闘機は新郷飛行場を根拠として霸王城の橋梁掩護に任じ、華中、華南方面においては戦闘隊の主力を以て楊子

江、香港附近の掩護に任ずると共に機を見て進攻し敵航空戦力の破擧に努め、特に夜間月夜等を利用し衡陽、遂川、桂林等の敵主要飛行場に進攻して相當の戦果を収めつつあり、その根拠基地を武漢に前進飛行基地を白螺磯（岳州東北）に設けた。

かくの如くして全軍の周到なる処置、就中防空の効果揚り集中は予定の通り進歩しつつあった。

当時敵は我が京漢作戰に関しその実施近きを予察せるものの如く防衛強化に努めつつあつて、その河南方面における作戰指導は当初主として湯恩伯軍（九乃至一〇箇軍）を以て我が進攻に対するものと判断せられた。しかしてそのうち五乃至六箇軍を黄河河防及び京漢沿線の拠点確保に任せしめ、精鋭なる機動兵团（三箇軍）を禹県、臨汝附近に控置し、該地区既設陣地の利用と相俟つて組織的反撃を企図しあるものと觀察されていた。しかして洛陽方面に我が作戰進展するや、敵は右兵力のほか、更に該地周辺の三乃至五箇軍及び第八戦区よりの救援兵力（多くも二乃至三箇軍）を合し、極力これが防衛乃至は反撃を努めるであらう。この際又第五戦区方面から一部（二乃至三箇軍）を以て第一戦区の作戰に協力せしむる算が大である。これを要するに主作戰方面に予期せられる敵交戦兵力は一八乃至二〇箇軍三五〜四〇万（内中央軍二分の一）と判断された。

この敵に対する我が兵力は師団三、戦車師団一、独立旅団四、騎兵旅団一合計一四万八千であつて、略々敵兵力の二分の一弱に過ぎなかつたが、従来は戦績に鑑み作戰目的を達成し得るものと考えられていた。

〔許昌攻略及び京漢打通〕 第十二軍は四月十七日夜第三十七師団、混成第七旅団を以て黄河を渡河し中牟附近の敵陣地を撃破し、一部を以て十九日夕までに鄭州を占領し、主力を以て新鄭に進出した。この間第五航空軍は戦爆の各一部と直協隊の主力を新郷、彰德及び運城に展開してこれに協力した。殊に中牟附近の戦闘において

は敵砲兵を殆ど壊滅に陥らしめた。

軍主力は十九日払暁より第六十師団を中央に霸王城東西の地区より攻勢を開始し、二十四日第六十二師団、第三十七師団及び独立混成第七旅団は新鄭東西の線に態勢をととのえて許昌攻撃を準備し、四月三十日からこれを攻撃、五月一日許昌を占領、この間敵新編第十五軍及び第二十二軍の許昌方面へ攻勢に転じ来れるに際し、我が第六十二師団は遭遇戦を交えてこれを撃破した。又第六十師団は二十一日襄陽を、二十四日密県を占領し、独立歩兵第九旅団は汜水の敵を駆逐し、二十四日その西南方地区に進出した。

黄河北方に集結していた第二線兵团の第二十七師団、戦車第三師団等は第一線兵团の黄河鉄橋通過後これに続いて同橋梁を渡り二十日までに大部の通過を終つて南進した。

以上の間第十三軍の一部は四月二十三日寿縣附近から攻勢を開始し牽制の目的を達した後、五月八日には反転した。

第十一軍の一部は五月一日長台関から確山附近に向ひ北面して攻勢を開始した。

五月五日第十二軍の一部は郟城占領、武漢地区に転用すべき第二十七師団は引続き南進して五月九日確山に到着し、ここに京漢陸路打通成り南北の連絡を完成した。

〔洛陽方面に向ふ旋回作戰〕 北支那方面軍は初め敵湯恩伯軍はその主力を郟城西方葉縣附近におくものと判断し、これを捕捉するためには郟城附近に進出した後西北方に急旋回すべく企図していたが、敵はその後主力を北方に移したため、計画を変更し許昌攻略後直ちに洛陽方向に旋回して軍主力を以て鄭州方向に各一部を以て登封、禹県、襄城等の方向に進出して当面の敵を各個に撃破するに決し、五月一日乃至二日行動を開始した。

第六十師団は五月四日登封東側の敵陣地を攻撃中であり、第六十二師団は五月三日禹県を攻撃して敵第二十九軍を撃滅し、戦車第三

師団は退却する敵を蹂躪しつつ西進して四日臨汝附近を掃蕩中、騎兵第四旅団は二日許昌西南方地区にて敵を撃破した後、四日臨汝西北に進出、第三十七師団は四日臨汝に達し、独立混成第七旅団は四日襄城を占領した。

かくして敵第三十一集團軍主力、第十二軍及び第二十九軍が登封及びその南方山地内にあるを知り我が第十二軍は主力を以てこれを包囲し、一部を以てこの敵の西南方への脱出を妨ぐる部署をとつた。即ち第一百十、第六十二兩師団を以て東南方より此の敵を攻撃し、戦車第三師団、騎兵第四旅団を以て概して洛陽南方地区において遮断網を構成せしめ、第三十七師団、独立混成第七旅団等をして各当面の敵の撃破にあたらしめた。

敵は五日夜半より逐次臨汝東方地区を経て西方に潰走し、その一部は八日頃大營附近において第三十七師団及び独立混成第七旅団の包囲を受けて大打撃を蒙つたが、爾余の敵は我が戦車師団の追撃意の如くならず西方に逸出するに至つた。

他方北方に位置した敵第一戦区軍主力は洛陽、宣陽の線に態勢を整理して洛陽方面に突進する日本軍を南北より挾撃せんとするが如きに鑑み、北支那方面軍は九日洛陽周辺の敵を撃滅するに決し、第十二軍主力をして洛陽、新安方面に突進して敵を西北に圧迫撃滅せしめ、山西省にある第一軍の第六十九師団長の指揮する約二旅団をして垣曲附近にて黄河を渡河、その主力を以て新安方向に突進して敵の退路を遮断し、その一部を以て西方の陝右に向わしめ、又汜水にある第六十三師団を基幹とする野副兵団を以て洛陽北方を経て新安方面に前進せしめた。

これより先、第十二軍主力は登封西南方附近の敵を撃滅後、一部を以て洛陽方面を監視するに止め、その他は西方に向い敵を追撃中であつた。又野副兵団は十二日洛陽東北地区より更に西進を続け、第一軍の部隊と呼応し東西から新安を攻撃して五月十四日同地を占

領した。

北支那方面軍は五月十四日「洛河河谷の敵を捕提すると共に速かに洛陽を封鎖し適時之を攻略する」に決し、野副兵団をして洛陽を封鎖せしむると共に、第十二軍主力及び第一軍の一部を以て西方に向い追撃を続行せしめた。

かくして第十二軍の第三十七師団は十四日嵩県を占領、更に敵の退路を遮断するため洛寧及び盧氏に向い二箇の挺進隊を派遣敵を急追せしめ、両挺進隊は随所に敵を撃破しつつ二十日盧氏に進出した。又第一軍の部隊も新安攻略後西南方に追撃を続行して宜陽西方地区に進出したが、その後命令に基き西方黄河河畔陝県方向に転進、優勢なる敵と大營附近で対峙するに至つた。

〔洛陽攻略——史上に名高い古都陥落〕 さきに洛陽に対し封鎖の処置をとつた北支那方面軍は速かに洛陽を攻略するに決し、五月十九日野副兵団に新たに戦車師団の主力、第一百十師団の一部を第十二軍から転属し、野副兵団をしてこれが攻略に任せしめた。

洛陽は典型的な中国の城壁都市であつて野副兵団は十九日から洛陽外郭陣地に対し攻撃を開始したが、陣地堅固のため戦況進展せず。ここにおいて方面軍は改めて野副兵団を第十二軍の指揮下に入れ、第十二軍をして洛陽の攻略を担任せしむることとした。

第十二軍は五月二十三日午後一時を期し、第六十三師団の主力を以て洛陽の北及び東北正面から、戦車第三師団の主力（歩兵六大隊、砲兵三大隊を属す）を以て西北角に重点を指向し、西正面より洛陽城を攻撃し南方に脱出する敵は騎兵第四旅団をして洛河の線においてこれを捕提せしむることとした。二十四日我が軍は洛陽の敵に対し投降を勧告したがこれに応ぜぬため午後一時から攻撃を開始し、城壁の一部に突入し、五月二十五日史上に名高き中国の古都洛陽を完全に占領するに至つた。

第五航空軍は四月中既に陝西、河南方面の敵航空制圧に任じ、五

月初頭より衡陽、遂川方面を制圧して次期湘桂作戰を準備した。

4 湘桂作戰の敢行——ト号作戰

〔衡陽に向う攻勢——作戰指導の腹案〕 京漢作戰概ね順調に推移する間において、他方湘桂作戰は着々としてその準備を進められつつあつた。

偶々洛陽攻略の当日、即ち五月二十五日、支那派遣軍総司令官畑大將は予定の如くその前進司令部を漢口に推進し、第十一軍の諸隊も同日までに岳州附近に集中を完了した。

当時の判断によれば湖南省方面の敵は、当初長沙特にその南方地区において所在の戦力を糾合し、堅固なる陣地を利用して積極的に我が企図破摧に努めるであろう。この際第六戦区軍よりする増援兵力の一部を以て、先ず益陽方向に対する強圧を加えつつ、逐次到着する主力を以て長沙西方地区から側撃を企図する算大であろう。而して長沙攻略までに我に対する敵兵力は一三乃至一四箇軍四〇箇師内外である。

次いで敵は衡陽地区において、空地の反撃により極力我が進出阻止に努め、已むを得ざるも頑強なる抵抗によつて該地の確保を企図するであろう。衡陽攻略までに交戦を予想せられる兵力は二〇箇軍五五箇師内外であつてそのうち中央系は一四乃至一五箇軍と推断された。

又、雲南にある衛立煌の指揮するビルマ遠征軍六箇軍一六箇師の湘桂方面への転用如何は、北部ビルマにおける戦局の推移にも関連するが衡陽喪失の前後にはこれを転用する決意をする公算が大なるものと判断していた。

右判断に基き本作戦を担当する第十一軍としては種々検討を重ねた結果、概ね次の如き要旨の作戰指導の腹案をもつに至つた。

一、初め我が兵力を二線に区分し第一線五箇師団を概ね岳州東西

の線に併立する如く湘江以西に第四十師団を同江以東に第一百六、第六十八、第三、第十三の各師団を展開す、此の際特に外側には敵の蟬集攻撃を撃破し得る如く精銳師団を配置す
第二線師団として第五十八、第三十四及集中中の第二十七師団を控置す

二、五月二十七、八日攻撃を開始し沅江、益陽並に新墻河、汨水間の敵を捕捉撃滅す

敵第六戦区軍に対し我が右側を掩護するため一部の兵力を松滋河の線に進出せしむ

第二線兵団は決戦方面に使用する外、背後の敵敗残兵の掃蕩道路の補修等に任せしむ

三、汨水附近に於て敵を撃破せば撈刀河の線に向ひ敵を追撃し敵主要防禦線たる長沙東西に亘る敵陣地攻略の準備を行ふ

長沙攻略のためにはその西側に屹立する岳麓山を攻略する必要を生ずるならん、之がため有力なる兵団を湘江西岸に派遣して同山を攻撃せしめ直接長沙に向ふ兵団と策応せしむ

敵陣地の右拠点たる瀏陽は西北方より第三師団、東南方より第十三師団を以て包囲攻撃す

四、長沙東西の線を突破後衡陽の攻略を準備すると共に其の間東西南各方面より蟬集反撃し来る敵を撃滅す

衡陽の攻略のためには作戰資材特に攻城兵器の前送を行ひ火力を以て敵を制圧したる後同地を攻略す、但し状況によりては長沙攻略後の戦勢を利用し急追撃の後奇襲又は強襲により衡陽の攻略を行ふ場合をも予期す

〔攻勢発起——一部洞庭湖舟艇機動〕 軍は予定の如く左翼方面第三、第十三師団は五月二十七日払暁、その他軍主力は二十七日夜より二十八日に亘り攻撃前進を開始し、特に歩兵第二百十八聯隊を基幹とする部隊を軍直轄として二十七日夜岳州附近出發洞庭湖を舟艇

機動し汨水を湘江、長樂街方向に突進し、敵の退路を遮断すると共に当面の兵団の渡河に協力せしめた。

又特に海軍より派遣せられた水路啓開隊を以て二十八日岳州附近から行動を起し、湘江を清掃啓開し航路標識を設置して水路連絡線とした。

第五航空軍は五月十八日漢口に戦闘司令所を推進し臨時飛行隊を以て第十一軍の作戰に直接協力せしめ、第一飛行団を白螺磯に、第二飛行団を広東に、輕爆の主力等を漢口に展開し本作戦に協力せしめた。

各兵団は勇躍前進したが、敵は我が企図を予知し我が進撃に先だち撤退を開始しその主力は東方及び汨水南岸山地に退避せるものの如く、軍は閩王橋附近及び汨水南岸において、敵第二十軍の組織的抵抗を受け一兩日の戦闘を交えたるはか全般的には大なる抵抗を受けることなく汨水南岸の線に進出し、爾後の攻勢を準備したが、敵は撈刀河方面に依然退却を継続する徴候を認めたので、六月三日引続き攻撃を開始し、概ね追撃の態勢を以て六月六日頃撈刀河の線に進出し、爾後長沙及びその東方瀏陽に対する攻撃を準備した。

この間長沙北方達摩山山系には二箇師強の敵残存し、軍は第三十四師団を以て六月三日以来この敵を攻撃したが意の如く進展せず、五月更に同師団をして達摩山を繞回して湘陰方向に突進せしめたが、これもまた敵の抵抗に遭つて進展せず、一方長沙を速かに処理する必要上、遂に達摩山の敵を解囲して同師団を南下せしめた。

この間第四十師団の一部をして湘江左岸の要点を占領して達摩山の敵の西方への逸出を阻止せしめ、又湘江の湘江を阻止しある敵を撃破して歩兵第二百十六聯隊の突進を容易ならしめ、併せて長沙攻略のための火炮その他資材の水路輸送を促進するため、第二線兵団たる第五十八師団の一部をして湘陰方向に前進せしめ、六月八日湘陰を占領せしめた。

軍は予定に基き、第二線兵団を督勵して、第一線の後方に二条の自動車道改修をなさしめたが、連日の降雨のため道路は泥海の如く作業は遅々として進まず、陸路兵站の追隨は至難であつて、第一線兵団は六月上旬末まで殆ど後方補給を受けることができなかった。この二条の自動車道は軍の多大の努力に拘らず、特にその内東方の道路は使用不可能で、野砲、自動車等の車輛部隊はすべて泥濘の岳州——長沙道に充滿し困難を極めた。

〔長沙、瀏陽附近の攻略——果敢なる運動戰〕 六月七日軍は益陽及び瀏陽方面の敵を撃滅すると共に長沙周辺の敵に対する攻撃準備の部署を行つた。これに基き第四十師団は十一日益陽を攻略し、第五十八、第一百十六、第六十八師団は十一日より瀏陽河畔の敵に対し攻撃を開始したが、第五十八、第一百十六師団正面の敵の抵抗大ならず、又第三、第十三師団は十日より瀏陽南北より峻峻な山地による敵の攻撃を開始した。

軍は長沙攻略を促進するため十五日第三十四師団をして長沙西側岳麓山の敵を攻撃せしめ、又第五十八師団をして瀏陽河渡河後西北方に反転して長沙外郭陣地を東南方から攻撃せしめた。

六月十二日に至るや南方株州、湘潭附近の敵動搖の兆あるを認め軍は同地を占領するに決し、第一百十六師団をして粵漢沿線を南進して鉄道要点を占領せしめ、又東方第三、第十三師団が攻撃中の瀏陽附近の敵の退路を遮断する如く第六十八師団をしてその南方地区に急進せしめた。しかるに十四日には瀏陽の敵は撃滅せられ長沙は孤立するに至つたため、軍は第一百十六師団をして株州西方易俗河西側地区に進出して敵を求めて攻撃せしめ、第六十八師団をして株州南方昭陵に突進せしむると共に第十三師団をして醴陵に向ひ追撃せしめた。

第三十四師団及び第六十八師団の一部は六月十六日より岳麓山に対し、第五十八師団は同日より長沙に対し攻撃を開始し、十八日長

沙を占領した。本攻撃において岳麓山に対する我が航空部隊の爆撃威力は顕著なるものがあつた。

この間右翼第四十師団は十一日益陽を攻め、敵第七十三、第七十四軍を撃破して十六日寧郷を占領した。

左翼瀏陽附近第三、第十三師団方面は瀏陽附近の敵第二十七、第三十七、第五十八、第二十、第一百十四、新編第三軍等を撃破し、第十三師団は更に新来の敵第二十六軍十四日萍郷に進入せる報に接し、主力を以て東方に転進してこれを撃破する等、果敢な運動戦を以て終始優勢な敵を圧倒して軍の古豪兵团たるの面目をよく發揮した。

六月二十三日軍は第十三師団をして来陽に前進し粵漢線を遮断せしめ、第三師団を醴陵附近に集結せしめた。又逐次第二線部隊を以て後方警備を交代して第一線兵团を推進した。

〔第一次衡陽攻撃——追撃の余勢、不成功〕 長沙攻略後、軍は敵の態勢の崩壊に乗じ一部を以て衡陽に向い突進し、主力を以て爾後の作戰を準備するに決し、これに基き第四十師団は第一百十六師団の一部と共に六月二十二日湘郷を攻め、第一百十六師団主力は六月二十七日衡陽西北に達し、第六十八師団粵漢沿線を南進し二十六日一部を以て湘江東岸の衡陽飛行場を占領、主力は二十七日衡陽南方にて湘江を渡河し衡陽西南方地区に進出し、両師団は六月二十八日衡陽攻撃を開始した。二十九日湘江西岸を前進した志摩支隊（第五十八師団の一部）及び湘江を溯江した歩兵第二百十八聯隊はそれぞれ衡陽西北方及び衡陽東北角から攻撃を実施したが、いずれの方面も攻撃進捗せず、第六十八師団長佐久間為人中将及び同師団參謀長等も負傷する等損害続出した。

この結果翌三十日からは第一百十六師団長岩永汪中将の統一指揮下に攻撃を再興したが、敵の抵抗は頑強であつて依然成功せず、七月二日に至り軍は一時衡陽攻略を中止し、砲兵部隊及び彈薬を推進

し、航空部隊の強力なる直接協同と相俟つて一挙に敵を攻撃するに決した。蓋し敵陣地は河池城壁等を利用し巧妙に編成せられ極めて堅固であるのみか、敵の戦意は甚だ旺盛である。我は追撃の余勢を駆て急遽攻撃したため攻城火器、彈薬等の準備不完全で既に第一線は彈薬欠乏していた。敵の航空兵力が優勢なる一方破壊せられた長沙、湘潭等の飛行場の修復未だ成らず、航空部隊の適切な協力が不可能であつた等のためである。

七月初め敵は西南方湘桂沿線方面より逐次大兵力を推進し我が衡陽攻略部隊の背後を脅威し、我が部隊は逐次その包囲下に陥るに至つた。七月四日湘江西岸の第四十師団は永豐を占領し、軍はこれをして永豐南方の敵を撃滅せしめんとしたが、七月六日前述衡陽攻略部隊の状況に鑑み衡陽方向に招致した。

湘江東方地区においては、七月四日第十三師団は来陽を占領、第二十七師団は七月十五日に至つて醴陵附近に進出した。

〔第二次衡陽攻撃——一部成功、更に準備〕 七月十日頃に至るや後方からの火砲、彈薬の追送、航空部隊の準備等概成したため、軍は十一日から更めて重点を衡陽西南方に向向して攻撃を再開、若干の前進陣地を攻め、逐次包囲圈を縮めた上、十五日から本攻撃を実施し一部の地域を攻略したが爾後戦況進展せず、軍は既往の不成功に鑑み更に十分なる準備、就中第一線兵团の戦力を充実した後攻撃を復行するに決し七月十七、八日に亘り第十三師団を衡陽東側飛行場及び鉄道附近に進出せしめ、又第五十八師団主力を攻撃に参加せしむるため衡陽西北に招致すると共に、特に十五糎榴彈砲、十糎加農砲各四門を招致する等鋭意準備の完成を期した。

前述の間湘江東方の来陽、萍郷、瀏陽間の広大なる地域においては、敵第九戦区軍の反撃に対し、さきに長沙西側岳麓山攻略に任じた第三十四師団及び後方より追及した第二十七師団を以て七月中旬来醴陵東南方地区に進出せしめて当面の敵第五十八軍を撃破しこれ

を東南方に追撃せしむると共に、第三師団を逐次推進してその主力を以て七月下旬来陽附近に進出せしめ、衡陽会戦への参与を準備せしめた。

又湘西西岸地区においては新たに軍主力に追及中の第六十四師団をして七月中旬益陽以南の地区に進出してこれを確保せしめ、又七月二十七日第四十師団を衡陽西方地区に推進して敵解囲軍の圧迫に対し直接掩護に任ぜしめた。

〔第三次衡陽攻撃——軍長以下投降〕 七月下旬に至るや、衡陽攻撃の準備は漸く整えられるに至つたので、軍は七月三十日攻撃命令を下達すると共に軍司令官自ら衡陽に進出し、八月二日以降直接衡陽攻撃の戦闘指揮にあたつた。

右命令に基き八月四日午後五時より、第六十八師団は衡陽の南側陣地に対し、第一百十六師団はこれに連なり衡陽西南側陣地に対し攻撃を開始し、第五十八師団は八月五日から主力を以て衡陽西北より、一部を以て北側より攻撃、第十三師団は湘江東岸地区からその砲兵及び遊撃部隊を以て第六十八師団の攻撃に協力せしめ、五日夜一部の兵力を強行渡河し、第五十八師団に協力せしむる予定であつた。

しかるに八月四日以来各師団の攻撃は意の如く進展せず、六日特に第六十八、第一百十六師団は衡陽南側岳屏に戦力を集中して攻撃を続行し、その他第五十八師団もまた攻撃を再興したが、南部では僅かに第一百十六師団が敵線の一部を奪取するを得、第五十八師団もまた西北角の奪取に成功し、初めて市街の一部に進入するを得た。第十三師団方面の渡河攻撃は寧ろ徒らに損害を招くのみであり師団砲兵の弾薬も欠乏を来したので、軍命令によりこれを中止し単に牽制のみを行わしめた。

七日全線攻撃を復行したが依然攻撃進展せず、なお更に数日間の攻撃を要するものと判断していたところ、七日夕刻第六十八師団正

面の敵小部隊投降し来つたため、軍は敵の動揺せるを察し全線攻撃を続行、夜に入り敵の第一線を逐次攻略して市街に突入、漸次投降者増加するとともに、八日未明敵軍長方先覚以下師団長四名も投降し来つた。しかるに敵の一部はなお最後まで抵抗を継続し、その戦意悔るべからざるものがあつたが、遂にこれも午前八時頃までに完全に掃蕩して、ここに衡陽の攻略を終つた。六月二十八日第一次の攻撃を開始して以来実に四十数日目である。

因みにこの衡陽の攻略は我に対し中国軍の戦意の旺盛なるを感じしめた。殊にこの方先覚軍長は、その後我が軍の捕虜として巧みにその態度を偽装していたが突如脱走して、再び重慶軍に投ずるに至つたのであつた。

〔第五航空軍の目覚しい奮闘〕 抑々本作戦は江西、湖南方面における敵航空布陣の軸心を穿貫して行く作戦であり、加うるに敵米華航空勢力は長沙攻略頃において我の三倍、又衡陽攻略頃において我の五倍に達した。この関係は既述の如く我が地上部隊特に後方輸送の昼間行動を著しく制限すると共に、航空部隊の絶大なる奮闘を要求した。即ち広く地上作戦地域の両側に亘り広西省以北の敵航空基地制庄、連日に亘る衡陽の夜間爆撃、敵の火制下未修復飛行場に対する着陸連絡、長大なる後方地域に対する空中掩護（戦闘隊操縦者の一カ月搭乗時間一〇二時間に及ぶ）等、第五航空軍の奮闘は目覚ましいものがあつた。

〔第十三軍の牽制作戦〕 第十一軍の実施する長沙及び衡陽攻略に呼応し、第十三軍はその第七十師団を以て浙贛鉄道沿線から敵第三戦区軍に対し牽制作戦を実施した。該師団は、六月九日、金華西南方地区から行動を開始し優勢なる当面の敵を撃破しつつ、十二日竜游を、二十六日衢州を攻略し、蟬集する敵に対しよく果敢なる攻勢を以て打撃を与えたが、同二十七日、第十一軍方面において衡陽飛行場我が手に帰するや、軍命令に基き反転して金華附近に集結し

た。

註 大陸打通作戦の経過については、附図（第七）を参照せられ
たい。